# 第一章　日本語の構造原理

## 一

現今普通に行はれてゐる文法學體系といふものは餘りに論理的機構に傾き過ぎてゐないであらうか。勿論文法の事實は言語的接踵に於ける關係性の間に成立し、分析綜合過程を骨子として發達して來たものであり、隨つて文法體系の中軸を成すものはかゝる論理的機構でなければならぬ。イェスペルセンの所謂より寛容な論理（a broader-minded logic）或は論理的習慣體制の如きものが文法體系の根幹を成すべきものである。しかし論理的文法機構は文法の總てではない。それは叙述面の文法であり言語構造の文法である。言を述べるための文法であり、述作的文法或は製作の文法である。こゝに於て私は論理的文法機構に對し、その上位的なものとして成立する倫理的文法機構及びその下位的なものとして成立する審美的文法機構の存在性を認めようとするのである。一體言ふといふことは單に述べることではない。私が獨りで何事かを言ふことではない。常に汝に對して然々の事を言ふことでなければならない。獨語ではなく對話である。我と汝とのダイアローグといふ意味に行はれるものでなければならぬ。社會的、更に歴史的でなければならぬ。言ふことは言語行動である。叙述性はかゝる言語行動に含まり、その内容を成す一屬性に過ぎない。故に叙述が眞に言ふことゝなるためには、對汝的な行動性が之に加はり、對話的とならな

ければならぬ。對話性或は行動性は言ふことの最高次の屬性である。對話性とは如何なることであるか。それは我と汝との辯證法的關係そのものである。私は之を倫理的緊張關係と稱するのである。語らんとする相手方への配意と語り手の自己反省とが相互に關係して、倫理的緊張の場といつたものを構成し、その上に於て對話現象が種々に展開して行くのである。かゝる倫理的緊張には種々のものがあるが、それが叙述面に投影し、論理的文法機構に樣樣の曲率を與へるのである。對話性が叙述面を屈折せしめるのである。對汝的な辯證法的交涉關係に對應し、叙述機構面の上に、表徵的變異を呈せしめるのである。かやうな機構性は、叙述面に執する論理的文法の考へ方では、到底解決することの出來ないものでなければならぬ。別次元的に成立せる文法機構でなければならぬ。論理的文法機構の上位的なところに體系を成すものでなければならぬ。それは對話面の文法、社交の文法、行爲的文法、間柄の文法などともいふべき倫理的習慣體制であり、私は之を倫理的文法機構と稱するのである。かやうな倫理的文法機構に對し、論理的文法機構の下位的なところに審美的文法機構が成立するのである。それは如何なる根據の上に立つものであるか。叙述性は言語行動に含まりその內容を成すものであつたが、叙述性の機構は、內に表情性を含むものでなければならぬ。表情といふことは主觀的情意の表出であり、生命的自然に直結するデモニッシュ的な契機である。故に多くの場合、叙述機構を破壞し、その鐵則を危殆に頻せしめるのである。省略し顚倒し重加し贅言し、その本然のまゝでは毫も文法機構などに貢獻する代物ではない。しかし、文學特に詩歌の創作などに於ては、よくこの表情的デモニッシュを調整し、更に之を文法の事實にまで昇華せしめてゐるのである。それは、叙述面の裡に感情の琴線を引く文法であり、言語美の脈絡をつける文法である。審美的文法機構と稱するものは、かやうな文法

事實の體系化をいふのである。從來の文法學體系、殊更西洋文典に依據して立てられた文法學體系は、何れも論理的文法機構にのみ執はれ、その上位的機構である倫理的文法機構、及びその下位的機構である審美的文法機構の存立性を殆んど度外視してゐた。勿論、倫理的文法は本體が現實社會の倫理的緊張の場であり、論理的文法の叙述面を形態の如きものとして成立せる敬讓尊卑の文法であり、審美的文法は表情的デモニッシュに發し、論理的文法の形態間の相關々係として成立せる玉の緒の文法であり、西洋流の論理的文法機構の次元面にはそれ〴〵只消極的な影像としてほか映り得ないものであるから、容易にその獨自性を認定することはできないであらう。しかし、歐米諸語とか、支那語とかを取扱ふ學者ならばいざ知らず、現にこの日本語を對象としてゐながら、只管西洋文典の教說を憚り、世界に誇るべき日本文法機構の眞相を顯揚することを怠つてゐたのは、關係學者の大なる手落ではなかつたかと思ふ。近時動もすれば、國語の愛護とか尊重とかといふことが謂はれるのであるが、それも盲目的に然叫んでゐるだけでは只それまでの事で、何等國語に對し寄與する所以のものではない。學者は須く理性的媒介によつて事の眞實を示さなければならぬ。周に寄つてたかつて之を讃美嘆賞するよりも、內に潛り拔けて日本語の持つ性格とか、優秀性とかを事實の上で證明しなければならぬ。その元を糺せば西洋文典の殘渣で、只表面上或は感情的に口喧しく色々なことを叫んでゐるのでは、倫理的文法審美的文法は愚、恐らく論理的文法機構すら明瞭に說き證すことができないのではなからうか。しかし幸にも論理的文法では富士谷成章、審美的文法では本居宣長、更に倫理的文法では山田孝雄博士の業績があるため、我々は眞の日本文法機構の姿に面接することができるのである。この意味から富士谷文法、本居文法、山田文法の三者は、我が國文法學史上の大金字塔であると言つても過言ではな

いと思ふのである。

以上の如く、現今流布してゐる文法學體系といふものは、多く論理的文法機構に偏し、倫理的文法機構と審美的文法機構との獨自性を全く見失ひ、日本語のやうに右事實の儼存してゐる言語にあつては、之を論理的文法の附庸物として、乃至は消極的にしか說述されて居らぬのである。かやうな文法機構の全面に對する認識の偏向が、更に論理的文法機構內に於ても亦同樣な偏向性を暴露してゐる。それは一言にしていへば、主述の統合關係に吸引されてゐることである。命題性が論理的文法機構を餘りにも色づけ過ぎてゐることである。勿論、論理的文法の主軸は主述的統合の關係であり、命題性であることは疑を容れない。しかし、論理的文法といふものは單なる主述的關係ばかりではない。又主述の統合をその理想態とするものでもない。論理的文法の事實は種々雜多な構造性でなければならぬ。その中主要なる一つとして主述關係の如きものがあるのである。然るに、主述關係を以て論理的文法の總てを解決せんとするのは、言語の論理と論理學の論理とを混同するものと言はなければならぬのである。勿論ロゴスは言語と論理とを意味するやうに、現在論理學で取扱ふ論理は言語の中から發展して來たものであるともいへよう。言語の論理は論理學の論理の母胎であるとも考へることができよう。しかし、それだからと言つて論理學の論理を以て言語の論理を解明することは出來ない。言語の論理はより寬容なる論理、或は論理的習慣體制である。言語の構造的入組であり、言語主觀の骨體である。それは基體的論理であり、一面からいへば論理以上の論理である。現今普通に考へられてゐる論理學の論理を以てすれば多分に洩れて行くものゝある論理である。故に私は之を構造性とも稱するのである。或はそれらのものは總て眞の論理に到達しない劣等の論理、又は論理の退化せる化石

的論理であるとも言ふであらう。未發展の論理、枯渇せる論理であるともいふであらう。しかし、さやうな考へ方では之等に對し眞の解明を與へることはできないのである。謂はゞ消極的にしか把握することができないのである。之等のものを眞に積極的に把握せんとするには、須く論理學的論理の立場から一歩退いて、言語的論理の雜多な中に入り込んでその構造性の秘奥を探らねばならぬ。しかしそれは、心理學や社會學などに依據することを意味するのではない。心理學的言語學とか、社會學的言語學とかといふものは、比較言語學や史的言語學などの中に素材的に分散してゐた文法事實を救濟するに役立つたが、文法機構そのものが心理學や社會學に住する以上は眞にその獨自性を發揮することは出來ぬ。しかも、かゝる心理學的言語學者や、社會學的言語學者の示す文法機構は、矢張依然としてその內實が論理學的論理の色濃きものと言はなければならぬ。容器が取換へられたが、その內容物は元の代物である。加之それらは多く、未だ語彙的纏綿を排除し切らぬ原本事實的なものに過ぎない。かく言ふ私も、心理學的言語學や社會學的言語學の文法學に對する貢獻を認めない譯ではない。殊にソッスュール學派の言語學は、文法學を言語學中正當な地位に引據ゑた。豐富深遠なる學理的根據を以て、新しい文法學體系を提出した。しかし我々は徒にソッスュールの科學的魔術の中に夢みてゐてはならないのである。之を超え、更に一段と歩を進めなければならぬのである。それには、先づ何よりも、文法學は純粹言語學として語彙的羈絆を脫する道に進んで行かねばならぬ。動く文法學、眞に歷史を持つ文法學の指針方途は之以外にはないのである。心理學乃至社會學的言語學の缺陷は、かゝる語彙的羈絆をそのまゝ許容したことにある。次にギリシャ・ラテン以來の論理學的論理の殘滓を去らなければならぬ。殊に日本語に於て然りである。日本語では嚮に述べた如く、論理的文法機構の外にその上位的

なものとして倫理的文法機構、下位的なものとして審美的文法機構が存立するのである。然るに論理に執する以上は、かやうなものを全然見失つてしまはなければならぬのである。のみならず、論理的文法機構それ自體ですら主述の命題的關係に偏向せざるを得ないのである。論理的文法機構は言語の得てゐる論理性、即ち言語構造そのものの解明ではなく、言語に對する論理學の適用の如きものとなつてしまふのである。故に我々は、何よりも先づ論理的文法機構中に潜む論理學的論理の癌に大手術を施さなければならぬ。しかして新に言語の論理の立場から論理的文法の體系づけを行はなければならぬ。基體論理とか母胎論理などとも稱すべきものの上に立つて、論理的文法機構を殘りなく解明しなければならぬ。かくすることにより、又逆に論理學の論理に對しても或は何等かの寄與貢獻を爲すことが出來るかも知れない。

文法機構全面に對する認識の偏向が、その中軸を成す論理的文法機構の偏向性を暴露してゐるのであるが、更に論理的文法機構の偏向はその骨子を成す主述的命題機構の正當な認識の缺如を暴露してゐるのである。それは如何なることであるか。一體、嚮にも多少觸れて來たことであるが、主述關係といふものは、論理學の論理として考へれば別問題であるが、一歩基體的立場に退いた言語の論理として考へると、種々の他の關係機構と同列的な一關係に過ぎないのである。何等論理的文法機構乃至全文法機構の前に立廣がるべき性質のものではないのである。然るに文法學上最も重要な概念である文といふものを、多くの人々はこの主述的統合を以て說明してゐるのである。それには勿論、心理學や論理學の術語を借用し、種々巧妙な言ひ方をしてゐるのであるが、結局文といふものは主述關係によつて成立すると言つてゐるのである。しかし、主述關係以外の形をとる文は多樣にあり、又主述關係の形

をとつても文とならないものも多數ある。即ち主述關係で文を說明したのでは、說明と事實との間に喰違が生ぜざるを得ないのである。そこで、前者の如きものを幼稚な未發展的なものとして兎角繼子扱にし、成可文といふ名に價しないものであるかの如く說き、反對に後者の如きものを餘分に厚遇し、出來るだけ文といふ名を與へようとするのである。しかし如何に彌縫しても誤魔化しても、虛僞は虛僞としてどこまでも附纏つて行き、果ては文法體系を蜂の巢の如く虫喰んでしまふ。一體、文は思想の完結體で、內容的には明瞭に決定されてゐるのであるが、更に之に外形的にも明瞭な解決を與へなければ言語の上の說明にはならぬのである。即ち、思想の完結を所記とする能記は如何なる姿體を呈するかを正當に說明しなければならぬのである。少くとも、文法學上文を定義づけんとするには斯くしなければならぬと思ふ。そこで主述の統合形式を以てするのでもあらうが、それは眞に言語の上に立つてのものではなく、論理學的先入觀念に禍されたものである。その證據に、前述した如く、言語現象に於ける文の全面を充分に蔽ふことが出來ないのである。文を定義しながらそこから多分に文が洩れて行き、其の空所に文ならざるものが入込むのである。主述の統合を多少ゆるやかにしたものは語群觀念である。或はかゝる語群觀念は眞の言語構造から生れたものであるとも考へられないことはないが、その出現過程とか實績成果とかといふものを考へてみると、矢張主述統合のバンドを弛めたものとしか思はれない。かやうな語群觀念を文の定義に適用すると如何なることになるか。しかし、それも單に前の考へ方を同一場面の上に廣げただけで、過不足の生ずる點に於ては依然として變りはないのである。即ら語群ならざる語文とか單語文とかと稱せられる文があり、又一方語群は必ずしも文とならないのである。斯くて現在最も尖銳な學者と目せられる人々は多く文の定義を全く斷念し、文を文法學

から追放せんと企てゝゐるのである。即ち主述統合を語群に廣げた方向に更に廣げて行き、之を極限的に進めれば文の形相的說明が解消することは必然であり、隨つて文の把握を文法學的勞作の上で斷念するより仕方がないのである。しかし、文を追放してしまつた文法學は如何なることになるか。私はそれは文法事實の存在理由を否定することであり、文法學の對象を消失せしめることであり、引いて以て文法學の破滅を將來するものであると思ふのである。文法事實といふものは、思想の完結を目圖して成立し發展して行くものでなければならぬ。文法活動の目的方向といふものは常に思想の完結といふことでなければならぬ。それは直接的の場合もあり間接的の場合もあるが、兎も角、文法の事實は內面的な思想活動を完成し結了する爲のものでなければならぬ。しかして思想の結了體が即ち文に外ならぬ。文は思想活動が一先づ妥結せる言語の形式でなければならぬ。思想の完了を告げる意味のものでなければならぬ。勿論完了と言つても、それには種々の段階を考へることができよう。殊に流動的な思想とか精神の如きものでは、眞の完了といふことは到底期し得られないのである。隨つてこゝで言ふ思想の完了といふことは、思想が一應纏まつたといふ程の意味に過ぎない。しかしそれは只內面からのことであつて、文にとつてはかやうなことよりそれに對應する外形がより重要である。外形的に終末を宣告するものでなければならぬ。外形的に到達するところまで到達したものでなければならぬ。それは如何なることであるか。外形的に終止符を打つことは如何なる力に依るのであるか。私はかやうなものを文法活動の斷止點に於て最も適確に摑むことが出來ると思ふ。文法活動が斷止するといふことは文法の發展がその極限に達し、も早それ以上進展することのできない地點に至つたことに外ならない。文法が十全に爛熟し切つたことに外ならない。それ以上に一步を進めれば文法以外の世界に顚落す

る、百尺竿頭に到達したことに外ならない。文の正當な意味は、實にかやうなところに求めなければならぬのである。文は文法活動の斷止に於て生産せられるものでなければならぬ。故に文法の活動は文に至つて止まる。文の外に逸脱すればそれはも早文法の事實ではない。文は文法活動の場であり、文法現象の世界である。文法は文を宇宙とする事實である。隨つて文を否定すれば文法の成立根據が根こそぎ取去られたことになる。文なき文法は宇宙なき宇宙塵の如く、考へることの出來ないものでなければならぬ。故に文を確と把握しない言語學者は、多く心理學とか社會學とかといふものにその安住の世界を求めようとする。しかしそれでは文法學ではなく、心理學や社會學の特殊部門の如きものに過ぎない。隨つて文法學の自滅解消といふことにならざるを得ないのである。以上の如く、文の否定は文法學にとり戰慄すべき結果を齎すのである。文法學自體の屋臺骨を打碎く業に外ならぬ。しかして、かやうなことは取りも直さず文を主述的に定義せんとしたことに起因するのであるが、更にその根本病因を糺せば文法機構、特に論理的文法機構に於て論理學的論理の横行を容許せることに禍されてゐるのである。

今日までの文法學は種々に訂正せられ考へ直されて來たのであつたが、多かれ少かれ兎も角命題論理に禍されたものであつた。主述關係といふものが何等かの形でその文法機構を支配し、かやうな框の中で種々に文法の事實を考へて來た。主述の統合といふものは文法事實の一領域に過ぎないのである。かやうな一領域的なものを以て文法の全領域を蔽はんとして來たのである。部分を以て全體を盡さんとし、種々に糊塗して來たのである。その結果、一面に於て論理的文法機構のみに偏向し、他の倫理的文法や審美的文法の機構性を全く忘迭し、他面に於て文法成立の宇宙ともいふべき文を否定する方向に導入し、斯くて今日最も進歩的と目せられる文法體系は殆んどアナアキ

ズムに陷つてしまつてゐるのである。眞の意味の科學的文法學といふものは全く瓦解の狀態である。文法學の終末論的時代を思はしめるものさへある。しかし、言語の事實が文法言語として活動しつゝある以上は、文法事實の自律性を沒却することが出來ぬ。學體系は死滅しても、その母胎である事實性は依然として永續して行くのである。今日までの文法學は此の時に於て乾坤一擲、死して生きかへらなければならぬのではないかと思ふ。命題論理に禍されてゐた過去の古き體系を蟬脫し、新しき文法體系の緒に就くべき時ではなからうかと思ふのである。近來頻に知識偏重の弊が叫ばれ、文化の各部面が新なる體制へと胎動しつゝある。勿論それは、知性の否定とか閉塞とかを意味する運動であつてはならぬ。人類の方向は常にホモ・サピエンスへでなければならぬ。しかし、その基體性を忘れてはならぬのである。如何なる文化にも常に報本反始といふことがなければならぬ。眞の復古精神といふものは、かやうなことをいふのである。その基體に省みることである。ルネッサンスとか、古學とかといふものは、皆かくして爛熟せる舊時代の上に新時代を建設して來たのである。私は文法學も他の諸文化と同樣、否寧ろそれらに魁けてその基體性に省み、新なる緒に就かなければならぬのではないかと思ふ。殊に何よりも先づその癌を育成せる論理的文法機構を爬羅剔抉してみなければならぬ。それには論理的文法機構を、從來の如く論理學的論理を中心とする考へ方から蟬脫し、眞の言語論理の立場に立つて分析して行かなければならぬ。より寬容なる基體論理の中に立つて說き證さねばならぬ。論理學に發展分化した論理に透引されることなく、かゝる論理を包含する原始論理、母胎論理を解明しなければならぬ。故に私はこの論說に於て論理的文法機構の眞相を徹底的に究明してみたいと思ふ。殊に日本語はかやうな分析を施すに最もふさはしい言語である。日本語は西洋文典を以てして割切れない多樣

の文法性を有し、しかもそれらは極めて直截簡明なる原理性によつて統一されてゐる。日本語は豐富にして簡潔である。我々が日本語の眞實に徹した文法體系を定立することが出來れば、それは啻に日本文法學に寄與するばかりではなく、世界の文法學界をも動すことが出來るのではないかと思ふのである。

## 二

論理的文法機構とか言語の構造性とかといふことは　如何なることを意味するか。記號一般は能記と所記との聯合體である。物的なものと心的なものとの比例關係物である。物心卽一の表現物からその表現的緊張と實在性とを消去せる非實在的な精神的物質であり、社會に住する各人の腦中に巢喰ふことによつて社會に流布せる非認識的な社會的物質である。記號領域の王座を占むる言語の實體も、かく能記所記の聯合せる比例關係物に外ならない。言語は言語記號でなければならない。しかし、言語は單なる音映像と概念映像との聯合體としての記號物ではない。言語は語彙ではない。言語が行使實演せられて言として展開する時、多く斷續的な言語粗密波として移行する。我が國古來の言を以てすれば詞の切れつゞきとして延展して行く。言語は粒子的であると共に波動的である。言語には質料的な語辭の外に、形相的な斷止連續の法がなければならぬ。こゝに於て我々は言語に對し新な事實の存立を認めることができるのである。卽ち音映像と概念映像との聯合體の外に、質點的記號相互間の斷續相を認定することができるのである。語彙的言語と共に關係的言語ともいふべきものを考へることができるのである。一次的言語事實の外に二次的言語事實を認めることができるのである。文法の事實、特に論理的文法といふものはかやうな二

次的言語事實として發達したものである。言語の構造性の生ずるところは言語の斷續相である。言語が斷止連續するといふことは如何なることであるか。言語が切れたりつゞいたりして、言語の波密波をつくるといふことは如何なることを意味するのであるか。言語が斷止するといふことは之を乘具とする觀念活動に一應の纏が生ずることでなければならぬ。詞絶は思絶の表徵である。そこに文といふものが生誕して行くのである。之に反し、言語が連續するといふことは觀念活動に未だ纏の曙光が見えず、只管發展の途上を辿ることでなければならぬ。連辭は思念續行の表徵である。そこに句といふものが生誕して行くのである。即ち思絶の能記は詞絶であり、かくて言語斷止を能記として思想の結了を所記とするものが文であり、又思念續行の能記は連辭であり、しかして言語連續を能記とし思想の展開を所記とするものが句である。從來かゝる文や句に對する考へ方といふものは、眞に言語的に行はれてゐなかつたと思ふ。或は主述論理を以て捉へんとする如く所記面に傾き、或は語群表象によつて捉へんとする如く能記面に傾き、又能記所記兩面に配意せられてあつてもそれは單なる申譯的な撮合に過ぎなかつた。文や句に於ける能所記比例關係といふものを眞に把握することなく、只形式的に然言ひ表し辻褄を合せたに過ぎぬ。さもなければ又、表現的統體の如きものに於て之を眺めて行かうとする。物心卽一の表現物の如きものに於て文や句を說明しようとする。言表の單位的なものに文や句の眞相を捉へようとするのである。しかし、言表は個人的創意的な言語の行使實演面であり、かやうなものから得た定義は何等言語學や文法學に寄與するところがない。徒にその周圍を循環してゐるに過ぎない。勿論、文とか句とかいふものは言語表現でないと言ふのではない。言語表現は、言語が文とか句とかといつた姿體に纏まることによつて行はれるものでなければならぬ。しかし、か

かる觀點からすれば言連鎖の如何なる部分も表現ならざるはない。音相ですら表現であると考へなければならぬ。こゝに於て文や句、更に語も辭も言語學や文法學の對象とならぬと主張する人々もあるのであるが、それは物の核心に觸れることなく、只その周邊を押へてみて然想定してゐるだけで、何等建設的な提言ではない。文體論的な生ける表現物は、そのまゝでは言語學や文法學の眞の對象とならぬが、かゝる表現物からその表現的緊張と實在性とを消去する時、それらは言語學や文法學の對象として大きく姿を現すものでなければならぬ。文や句の如きものも表現物としてゞはなく、語辭と同樣に記號物として之を捉へなければならぬのである。記號學などといふことを提唱してみても、それは只語辭や文法語片の如きもののみに於てさやうなことを言つてゐるのであつて、多少樣相を異にする文や句の如きものとなると、最早表現學的な方向に逸脫し、その極、現實的言語資料一切に疑問を抱くやうになるのでは、切角の意氣込も水泡に歸するではないか。記號學として言語學や文法學を立てゝ行かうとする以上、徹底的にその記號學的原理を以てあらゆる事象を解明するところがなければならぬ。殊に文や句の如き根本的なものに對しては、取分け然吟味して置かなければならぬ。私は思ふ。單なる語辭や文法語片の如きもののみに記號性を認め、爾餘のものに對しては何等記號學的原理を施す術がないならば、事々しく記號學などと言はない方がよい。言語學に記號學を云々する以上、少くとも文や句の如きものに對し記號學的解明が爲されてゐなければならぬ。記號といふのは一般に能記と所記との聯合體である　しかして個々の言語記號は、音映像を能記として概念映像を所記とするのであるが、かゝる言語の粗密波的移行そのものにも二次的言語として記號性が成立してゐるのである。それは一般に言語の斷續法とも稱すべきもので、個々の言語記號とは異なる意味の記號物でなければなら

ぬ。文とか句とかいふものは、かゝる記號物として生産せられるものである。即ち文は言語斷止を能記とし思想の結了を所記とし、句は言語連續を能記とし思想の發展を所記として生誕する二次的記號物である。

しかし、言語の斷止と連續とは相互に全く相矛盾する事實である。二次的記號物であるとは言ひ條、斷止と連續とは全く相異なる意味のものでなければならぬ。言語が斷止するといふことは、構成言語乃至は文法的言語として發展して來たものが、語彙的言語乃至は原始言語の線に停止することである。縷々千萬言を序でられたる連續言語と雖も、一旦斷止すれば語彙的放出によつて成る單語文と同列的である。故に言語斷止は言語活動が語彙的なものに直面すること、文法の極限位に立つことであると言はなければならぬ。若し文法の事實がかゝる斷止法のみであつたと假定すれば、言語活動は單なる語彙的放出による語文的小間切れの次續に過ぎないであらう。然るに、文法事實にはかゝる斷止法に對して連續法があり、斷止して語彙的放出線に停止せんとするものを引寄せ言語連鎖を成立せしめるのである。語彙的言語乃至は原始言語を、構成言語乃至は文法的言語とするのである。そこでは、個々の語辭は單なる材料乃至は要素物として相互は接踵依存して居り、文に對して間接的となるのである。翻つて考へてみるに、語彙的放出の語文の如きものも、それは單なる斷止ではなくして、外向的には他に近寄せられて連結する可能性を含む斷止體であり、內在的には自身分裂して要素的なものに斷切せらるべき可能性を含む單一體である。隨つて語彙的原始言語から連續法の生れ出る場所は、その內外兩面であると考へなければならぬ。內には分裂を介し、外には近寄せを介して連續法が成立するのである。しかしかゝる連續法の成立があつて始めて眞の意味の文法事實が開けて行くのである。勿論、連續事實の前に斷止事實がある。しかし、單なる言語斷止のみの跳梁するとこ

ろには未だ眞の文法事實が成立してゐないのである。文が幼蟲的に生誕してゐるが、文法は未だ成立してゐないのである。それは文即語、語即文としての文法未成の原始言語狀態に過ぎない。文法事實の成立には、言語斷止に對し、之と全く相反する言語連續といふことが生じてゐなければならぬ。言語連續が文法事實の積極的內容を形造り、之に對しその反動として言語斷止といふことが文法事實の中に克明に浮出るのである。故に文法事實としては、斷止の前に連續があると言はなければならぬ。語文的小間切れ狀態の上に先づ言語の連續法が現れ、それと同時に其の裡に言語の斷止法が生じ、かくて眞の意味の文法事實が成立して行くのである。斷止法は文法の極限事實であり、連續法は文法事實の眞只中である。言語が連續して句に結體することが文法事實の眞の成立因であり、それが文法事實の眞の內容を成すものであり、言語が斷止して文を生產することは文法事實の働く世界を限ることである。故に文は文法の宇宙であり、文法は文に於ける法であるといふのである。論理的文法機構とか言語の構造性とかといふものは、先づかゝる言語の斷續事實に於て考察しなければならぬ。詞の切れつゞきは文法學の中軸事實である。

言語の斷止連續といふことが已に言語記號的なものであつて、かやうなことによつて成立してゐる文は思想の結了を斷止によつて表徵せるものであり、句は思想の延展を連續によつて表徵せるものであり、それ〴〵能記所記の聯合物として考へることができるが、併し、斷續法は只單に右の如き意味に於てのみのものならば、未だ眞に言語記號的のものであるといふことができないのである。我々は言表上の種々の都合から、個人的恣意的に言語の斷止連續を自在に行ふことも可能である。立言的斷續法ともいふべきものを雜多に行ふことができる。しかし、かやう

なものは此處でいふ言語記號としての斷續ではない。法としての斷續、社會的制約としての斷續相ではない。二次的言語事實、文法の事實としての斷止連續ではない。斷續法ではなく、單なる斷續に過ぎない。然らば斷續法の眞義は如何なるところになければならないか。文法事實としての斷續法を單なる斷續現象と區別するものは形態であると思ふ。單なる詞の切れつゞきは個人的恣意的に自在に行ふことができるのであるが、形態の指標する斷續は社會的制約によつて言衆各個に與へられるものでなければならぬ。そこに斷續一般と斷續法との相違點があるのである。形態とは如何なるものであるか。形態を語辭の外表を形造る音列の如く考へてゐる人もある。語音或は音相の如く考へてゐる人がある。しかし、文法學上形態と稱するものは、かやうな能記全面の形相をいふのではない。言語の文法的指標物でなければならない。しかし、又單なる語形の如きものと一致するものではない。語形は語辭に固着せる形態であるが、形態にはかゝる語形以外のものがある。又語態などゝ稱せられるものでは尙更ない。それは成語乃至は造語の形相を意味するもので、文法事實としては間接的である。然るに形態は直接的な文法事實でなければならぬ。言語の斷止連續の種々相を指標づける表徵物でなければならない。言語の第二屬性とも見るべき文法の所在を示す能記、即ち言語形態或は文法形態でなければならぬ。かゝる形態には實質的なものと非實質的なものとある。實質的形態といふのは、何等かの音質を具有し、或はさやうな音質を積極素とする種々の形態であり、非實質形態といふのは、積極的にも消極的にも何等かゝる音質を具有することのない形態である。前者の實質形態には、屈折とか活用などのやうに自動的內生的固着的のもの、或は助詞とか助動詞などのやうなものを前置的又は後置的に添へて行く膠着的外附的離接的のもの等種々あるのであるが、要するに多かれ少かれ語彙的のものの纏綿

せる形態、謂はゞ語彙的形態、文法語としての形態に外ならない。然るべき音質がある以上、それが斷續法を指標する以外にその音質より來る象徴義、更に制約義が副次的に纏綿せざるを得ないのである。かやうな副次的な語彙的纏綿を超克せる眞の形態、或は純粹形態ともいふべきものは後者の非實質的形態である。即ち普通に語序とか語順とか稱せられてゐるものである。一體、言語が文法的となるといふことは言語活動自體が時間性を獲得するといふことに外ならぬ。單なる語彙的言語は物質自然の如く空間的散在として被動的であるが、文法的性格を帶びることによりそれ自體特有なる時間性を成立せしめ、人間に從屬する機關とは言へ、被動を超えて自動的となり、謂はば道具的なものから機械的なものとなるのである。しかしてかゝる特有な時間性といふのは、言語接踵の粗密波的斷續に存するのであるが、かやうな斷續の相を表示する形態の中、之を最も純一に示し得るものは何等の語彙性なき非實質的形態でなければならぬ。かやうな非實質的形態には先行的なものと後行的なものとあるのであるが、之等に就いては又後で述べることとする。兎も角、以上のやうな種々の形態が言語の斷續法の表徴物となるのである。つまり、形態と斷續との間に一種の記號的比例關係が成立するのである。形態が斷續關係の能記となり、斷續關係が形態の所記となるといつた姿體を呈するのである。かく形態的能記を獲得した言語斷續といふものが眞の意味の斷續法でなければならぬ。斷續の相が如何に鮮であつても、形態に對應せざる限りそれは斷續法ではない。文法事實としての斷止連續ではない。文法事實としての、乃至は言語としての斷續は何處までも形態的でなければならぬ。記號的でなければならぬ。形態的能記の裏打があつて、斷續法自身も能所記的聯合の記號形貌を呈し、そこに觀念活動と言語活動とが對應する。

形態が斷續法の能記物となるといふことは、文法學上二つの意味を有する。それは先づ言語の粗密波的活動に於て、制約的なもの記號的なもの、卽ち眞の意味の文法事實を限定することである。單に內容的な觀念活動の都合からのみ斷止し或は連續するもの、又外形的な言語活動の都合からのみ斷止し或は連續するものなどを排除し、常に記號的比例關係を保持しつゝ思想の完不完に對應して斷止連續する、眞の文法事實を劃するものである。形態的觸發なくしては、如何なる文法事實も成立つことが出來ないのである。形態は文法事實の支柱であり道標である。隨つて第二にかゝる形態は雜多の文法事實を集約定着せしめ、或程度の統一を與へるのである。例へば、動詞の六活用形は複雜多岐なる動詞の斷續法を統一したものであり、種々の助詞は觀念語一般の斷止連續的な粗密波的移行を道標づけ概括してゐる。一體、形態は文法事實と單に一對一的に對應するものではなく、或幾つかの文法機能の輻輳點でなければならぬ。單一機能の形態といふものは殆んどないといつてもよい。之は啻に形態のみではなく、言語とか記號とかといふものは一般にかやうなものでなければならぬ。例へば語辭の如きものも、本來多義的でなければならぬ。多義的であるから通時的には語義が變轉し、共時的には種々の意味に使用せられるのである。辭書に誌される語義的說明といふものは一般にかやうなものであるが、併しそれも尙未だ概念的構築に過ぎないのである。その概念的なることを脫却せんとして種々の事例を以て充すのであるが、それでも辭書的記載面上に住する限り、概念的なることを到底免れることはできないのである。眞の具體的語義は流動的であり、且柔軟である。形態も文法的概念或は文法義の表徵であり、謂はゞ文法機能の構造式的映像である。或形態の指標する文法事實は常に多機能的でなければならぬ。しかしてそれが具體的事例の一々にまで確と根を下してゐるものでなければならぬ、

隨つて或單一形態のみを採つて然るべき文法機能を眞に具體的に表徵することが出來る。それによつて種々雜多な文法機能が混然として聯想されて來る。故に或文法機能を眞に具體的に表徵せんがためには、差當つて必要なるもの以外のものを消去して行く方法をとらねばならぬのである。それには恰も自働電話の加入者番號を繰出す仕組のやうに、幾種類かの形態的操作を重加し、所期の文法機能を表徵するに必要なる形態的機構を形成しなければならぬ。例へば語順的工作の上に種々の助詞添加を行ふとか、語形變化に各種の助動詞や助詞などを添へて行くとかいつた、形態的重加に依る具體機能の析出を行はなければならぬのである。かやうに形態といふものは幾つかの文法機能を統一してゐる具體的範疇物であり、その反面に又、或文法機能を表徵せんがためにはかゝる形態の幾つかを重加しなければならぬ。そこに文法學は形態論（表示論）的方向と機能論（意義論）的方向とに分岐する餘地があるのであるが、ともかく兩者は完全に一々的對應を爲すものではなく、或種のずれがあるのである。かくてそのずれを形態的集約力によつて喰止め、文法事實の記號性を支持してゐるのであるが、かゝる集約力が弛びずれが增長する時、文法的變異が生じ通時問題が成立するのである。

かやうに形態は文法機能の具體的範疇物であるが、併しそれは眞の意味の文法機能の範疇では勿論ない。といふのは、かゝる形態を更に統一づけるものがあつて、それが最高次の範疇として君臨し、形態はその從屬物であり、中間的範疇といつた意味のものであるからである。かやうな文法機能の最高の統一者、卽ち眞の意味の機能範疇は如何なるものでなければならないか。形態を集約統一するものは語であるとも一應考へることが出來る。個々の語に、種々の形態が附屬するもののやうに考へることができる。例へば未然、連用、終止、連體、已然、命令の六活

用形が「行く」とか「來る」とかといつた個々の動詞に集約せられてゐるとも考へられる。しかし、個々の語には何等形態を統一する力はないのである。それは却つて形態に統一せられてゐると言はなければならぬ。少くとも文法上かく考へなければならぬのである。活用表の中へ個々の語が統括せられてゐるのである。さらばと言つて、又語の全集積の如きものにかやうな力があると考へることもできぬ。形態を統一する力なき語が如何程多數集合しても、矢張同然でなければならぬ。縱又、その全集積にさやうな力があり得ると假定しても、それは不盡數的なもので、考へることのできないものでなければならぬ。若し之を知性によつて捉へんとするならば、かゝる語の集積に執する立場を超え、却つてそれへ回歸する立場に飛躍しなければならぬ。背後から之を裏付けるものの上に立たねばならぬ。かくすることによつて、過去現在未來に亘り、不盡數的に現出して來る語の全集積的なものを支配すべき根源を掴むことができるのである。形態を集約統一する力はかゝる語彙的なものを眞に超越せる場所にあるのである。一次的言語を超え徹底的に二次的言語に立たうとする方向に之を求めることができるのである。隨つて、意義部の如きものには勿論さやうな力を探し求めることは不可能でなければならぬ。意義部は語彙的極限とも見るべきものであつて、最も一次的言語性の發現せる部分である。具體的言語は觀念的である一面文法的でなければならぬ。單なる觀念表示の言語はなく、又單なる文法表示の言語はない。勿論雜多な語辭の中に、より觀念的に傾いてゐるものとより文法的に傾いてゐるものといつた差別があるが、如何なる語辭も一般的には觀念的・文法的構造であると言はなければならぬ。しかして意義部といふものは專ら前者を抽象せる文法的概念である。かやうなものには到底形態を統一する力などあらう筈はない。只具體的言語活動では意義部が形態を吸引しなければその言語力を

發揮することができないのであるから、消極的意味に於て意義部は形態の集約者であるとも言へよう。しかし意義部は積極的に何等形態に關與する筋合のものではないのである。意義部が形態に對し消極的集約者であるといふことは如何なることであるか。語辭の具體相は觀念的文法的構造でなければならぬ。（意義部）＋（形態部）でなければならぬ。かやうな具體相から文法性乃至は形態部を捨象せる意味のものが意義部であるが、それは常に形態的缺如態のものとして、却つて純粹なる形態的集約者の映像を直ちにその光背としてゐるものでなければならぬ。意義部が消極的に形態を集約するといふのは、意義部そのものが形態を吸引するのではなく、かゝる光背的なものゝ力によるのである。それは勿論意義部に從屬するものではなく、却つて意義部を核體とせる語辭を抱擁し盡す範疇物でなければならぬ。普通に品詞とか語範疇などと稱せられてゐるものも、かやうな意義部の光背的映像の如きものでなければならぬ。過現未に亙り、無數に現出して來る語の全集積を殘りなく支配すべき根源的言語映像でなければならぬ。しかして眞正なる意味の機能範疇といふものはかやうなところに溯つて求めなければならぬのである。

以上のやうな意味に於ける機能範疇は、文法事實の最後的統一者である。言語の斷止連續の法を一先づ集約するものは形態であるが、かゝる形態をも集約し形態事實の出自する映像物として機能範疇があるのである。語辭とか意義部などの如き語彙的なものは、絶對に文法事實の範疇として立つことのできないものでなければならぬ。それは文法と全く次元を異にする一次的言語事實であり、廣い意味の名に過ぎない。漢字や假字を「マナ」「カナ」などと稱するやうに、言語の語彙的なものも本質的には名である。文法の諸事實は、かゝる一次的な名の言語の間隙

に成立してゐる二次的言語事實に外ならぬ。語彙的なものは音映像と概念映像との聯合せる記號物であるが、文法はかゝる音義的聯合物相互の關係方式を能記として成立してゐる高次的記號物である。即ち前者は略〻

$$\frac{(\text{能記})}{(\text{所記})},\quad \frac{(\text{能記})}{(\text{所記})},\quad \cdots\cdots\cdots\cdots$$

の如きものであるが、後者は

$$\frac{(\text{能記})}{(\text{所記})}+\frac{(\text{能記})}{(\text{所記})}$$

$$\frac{(\text{能記})}{(\text{所記})}$$

の如きものである。故にこの兩者を絶對に混同してはならないのである。文法事實は文法獨自の立場から何處までも純一に考へて行かねばならぬ。語形の如きものが意義部に從屬してゐるやうに見えても、助詞や助動詞の如きものが語辭に附加せられる要素であつても、意義部とか語辭などといふものは文法の範疇となることができないものでなければならぬ。それは外形上たゞ然見えるだけで、形態の輻輳する眞の場所は語彙的なものの裡に光背として動く機能範疇でなければならぬ。かやうなことは語彙的纏綿が極度に排除せられた純粹形態とも言ふべき非實質的な語順形態に就いてみれば最も明瞭に理解することができるであらう。例へば語順を根幹的形態とする支那語などでは、機能範疇が全く語辭と分離してゐる。即ち支那語では多くの場合、語順的配置を俟つてその語の機能範疇が決定せられるのである。語順的配置以前の語辭は單なる語彙に過ぎない。支那語ではかやうな語辭ばかりではなく、文字でも音韻でも一般に所謂「名」の傾向を持つてゐるのである。否、今少しく適確に言へば名と法とが分立的で

あるのである。それは兎も角として、然らばかゝる語順的配置といふものは如何なるところから發出するのであるか。それは勿論實辭の力でもなく虛辭の力でもなく、かゝる語彙的なものを超え、却つて之等をその背後から抱擁し照破する超越的な機能範疇意識によるのである。雜多な文法機能によつて描畫せられた範疇映像の動きによるのである。斯く機能範疇と稱せられるものは語形變化、膠着語片の如きものは勿論のこと、語順形態の如きものに至るまであらゆる形態をそこに集約することによつて、全文法機能を究極的に統括し、且領域づけてゐるものでなければならぬ。斷止連續の雜多な文法事實を橫斷し、之を幾つかの部門に類別してゐる範疇物でなければならぬ。それは群聚してゐる種々の文法機能の標示物であり、文法事實群に對する名であり、更に能記的なものとも考へらるべきものである。名詞とか動詞などといふものは、單なる語彙的なものに對する名目ではなく、文法機能の各領域に對する目印であり表札である。分劃せられたる雜多な文法機能——それらは一先づ形態に集約せられてあるものであるが、機能範疇はそれら一切を所記とせる能記の如く考へることができるものである。

機能範疇は文法の最高最至の事實である。あらゆる文法事實は常にこの機能範疇に歸結し、此處より發出し、それ〴〵具體的なものとして活動してゐるのである。文法事實の最も具體的尖端は言語の斷續方式の一々であり、言語活動に於ける粗密波的移行の種々相である。しかしてかやうなことも何等かの意味で行はれるものでなければならない。單に形式的に斷止し或は連續するものではなく、關係義とか文法義などと稱すべき、所記に對應する能記物でなければならぬ。個々の語辭を以てしては到底表示することの出來ない意義內容を表徵する爲のものでなければならぬ。勿論、甲言語で文法義であるものが乙言語では語義であり、乙言語で語義であるものが甲言語では文法

義であるといふやうに、對照法的には文法的事實と語彙的事實との間に交錯性がある。しかし、一般的に乃至は一言語の內部に於ては、文法的事實は語彙的事實の間隙に成立せる、より微妙にして高度な言語事實と見なければならぬ。しかも、言語事實である以上、何處までもそれは記號物でなければならぬ。單なる法則とか方式とかいつたやうに、觀念的或は形式的なものではなく、能記と所記との聯合體でなければならぬ。しかし、個々の斷止連續の事實は最も原本的にして直接的な具體的文法事實であるが、それだけに又多分に語彙的なものに領せられてある蕪雜なる文法事實と言はなければならぬ。その能記面は語彙的接踵によつて埋め盡されて居り、所記面は語辭の釀す意義內容と相縺れてゐるのである。かやうな斷止連續の種々相から語彙的纏綿を排除すれば、先づ形態が殘るのである。隨つて、形態は具體的文法事實の結晶物であり集約點であるといふことができる。一段と高められたる文法事實の相である。故に抽象的であり範疇的であり觀念的である。しかし、かゝる形態と雖も未だ語彙的名殘を止めてゐると言はなければならぬ。屈折變化や膠着語片の如きものは言ふまでもなく語彙的一面を有してゐる。實質的である以上如何に抽象化されてゐても、その裡に語義的なものが對應してゐるのである。更に、非實質的な語順に於てすら尙語彙的殘影が存するのである。語順は語辭の序列であり、隨つて語辭に依據する一面がなければならぬ。故に眞の純文法的なものを求めんとすれば、更にかゝる種々の形態的事實を超えて機能範疇に到達しなければならぬのである。機能範疇こそ純文法的事實であり、隨つてそれは形態以下を集約し、かくて全文法機能を十全に統括してゐるのである。機能範疇は文法の最高最至の極限的事實である。如何なる文法事實と雖も機能範疇にその通路を持ち、機能範疇より分出せるものでなければならぬ。ありとあらゆる言語斷續の法は形態を通じて機能範疇に

達し、機能範疇の動きは各種の形態に派生し、具體的な斷續法となつて活動する。故に機能範疇は文法學のアルファでありオメガであり、如何なる文法學的勞作と雖も機能範疇に貫かれてゐなければならず、機能範疇を定立するところに文法體系が成立して行く。機能範疇は文法體系の冒頭にも結尾にも中道にも介入し、その文法體系を嚮導し支持し完結せしめるものである。かく機能範疇は文法事實の極限物であり、文法體系の絶對者である。それは語彙的纏綿を全く排除せる純一無垢なる文法物であり、文法の文法であるからである。こゝに於て機能範疇は語彙的事實と完全に對立し、兩者は全くの矛盾關係に立つ言語事實であると言はなければならぬ。語彙的事實と文法的事實とは、言語事實の顯著な二面であるが、殊更機能範疇は語彙的事實に全く相反する事實として對立するのである。しかしてかやうな事が又一方、文法的立場よりすれば機能範疇が語彙を無限に抱擁して行くのである。機能範疇が語彙的事實の繫累なき純一な文法事實であるところから、否定を隔てゝ直ちに即一的となり、語彙的事實を限りなく包むものとみなければならぬ。そこに品詞とか語範疇などといふ概念の生誕する根據があるのであらうが、併し品詞とか語範疇とかいつても、固より機能範疇は與へられたる語辭を直接的に品等範類するものではなく、該機能領域内に入り來る語辭を無限に抱擁して行く意味のものでなければならぬ。その入り來る語辭は、支那語の如くあらゆる語辭が殆んど區別なくどの範疇にでも入り得る如き言語もあり、又日本語の如く語形や膠着語片によつて制限せられ或程度の區別あるものもある。兎も角機能範疇は文法機能乃至は形態によつて描かれたる圖式であり、構造式である。語彙的事實はかゝる範疇に自ら入り來る意味のものでなければならぬ。決して語辭の品等範類として機能範疇が定立せられるものでなく、文法の文法として、純文法として定立せられるものでなければならぬ。

論理的文法機構とか言語の構造性とかいふものは、大略以上の如き輪郭のものである。その最も原本的なるものは言語の粗密波的移行に於ける連續相を積極的事實として成立する斷續法であるが、更にそれらが言語形態とか機能範疇とかいふものに能記づけられ、集約統括せられてゐる全一體である。要はつゞくとか關係するとか、結合するとかといふ言語連續に基づき連續法と斷止法とが成立し、そこに向論理的な構造性、論理學的論理を含む言語論理が形成せられ、かくて論理的文法機構といふものが考へられるのである。しかして、かゝる論理的文法機構或は言語の構造性などといふものは、多く文法機構の根幹を成し骨子となるものであり、言語活動の叙述面は常にかやうなものによつて構成せられてゐる。

## 三

言語の構造性は基體的論理とも言ふべき言語本具の論理的機構である。未だ論理學的論理にまで發展せざる混溷論理、習慣論理、素材論理、前論理的論理などとも考へらるべきものである。かやうな言語の構造性は主述關係とか命題形式とかといふやうな、高度の論理性によつて解決することができないものでなければならない。そこには必ず洩れて行くものがあり、その全面を蔽ふことは不可能である。故に嚮にも述べたやうに、かゝる論理學的見地より一歩退いて、あらゆる言語論理を包む立場に於て之等の全體性を解きほぐして行かねばならぬ。それは如何なることであるか。私はそれは言語の連續法といふことの外にないと思ふ。個々の語辭を然るべき關係方式によつて結合し、個々の語辭で表示することのできない意義内容を表徴する二次的言語を形成するといふことの外にないと

思ふ。しかしてかゝる連續法に對し個々の言語で切れ〳〵に言表した場合にも存してゐた斷止が反作用的に方式化し、そこに斷止連續の法といふものが一般に論理的文法機構の原本的事實性となるのである。連續法には種々のものがあり、又如何なる言語にもその言語特有の連續法が發達してゐる。日本語にも日本語特有の連續法があり、又それらは種々のものに相分れて行くのである。しかしてそれらを知ることは軈て日本民族の思惟活動の核實を捉へる所以であり、日本知性の運命的特質を把握する所以である。以下かやうなことに就き少しく具體的に考察してみよう。

日本語の連續法を最も一般的に表明すれば、より觀念的な要素は先行的であり、より文法的な要素は後行的であるといふことになる。或は之を裏返しに、先行するものは常により觀念的な要素であり、後行するものは常により文法的な要素であるといつても差支ない。例へば「遠く飛ぶ」の如き結合に就いて考へてみるに、先行の「遠く」は「飛ぶ」といふ動作觀念の內容を狀態的に限定してゐるもので、「飛ぶ」に比し觀念的方向に傾いた要素であるといはなければならぬ。之に反して後行の「飛ぶ」は、この陳述の文法的責任を一切引受けてゐるのであつて、「遠く」に比し文法的色彩が著しく濃厚であるといはなければならぬ。又之を「遙かに遠く飛ぶ」とすれば、「遙かに」と「遠く」との間に矢張同樣な關係が成立してゐる。卽ち先行の「遙かに」は「遠く」といふ狀態觀念の內容を更に限定してゐるものであり、後行の「遠く」はこの形容の文法的責任の一切を引受けてゐるのである。隨つて「遙かに」は「遠く」よりも觀念的であり、「遠く」は「遙かに」よりも文法的であるといはなければならない。この際「遙かに」は「飛ぶ」に對し、直接的に關係してゐない。只「遠く」を介して間接的に關係してゐるに過ぎ

ないのである。更に「いと遙かに遠く飛ぶ」とした場合、「いと」と「遙かに」との間に又同様な關係が成立つ。即ち先行の「いと」は「遙かに」といふ狀態觀念の內容を程度的に限定してゐるものであり、後行の「遙かに」はこの形容に於ける文法的責任の一切を引受けてゐるのである。故に「いと」は「遙かに」よりも觀念的方向に傾いた要素であり、「遙かに」は「いと」よりも文法的方向に傾いた要素であるといはなければならぬ。この場合も、「いと」は「遙かに」にのみ直接に關係し、「遠く」には「遙かに」を介し、「飛ぶ」には「遙かに遠く」を介してのみ間接的に關係してゐるのである。今度は反對に「いと遙かに遠く飛ぶ雁」などとすれば、「飛ぶ」と「雁」との間に新しい直接關係が成立つ。即ち、先行の「飛ぶ」は「雁」といふ實體觀念の內容を修飾限定してゐるのであり、「雁」は「飛ぶ」を受けて文法的責任の一切を背負つてゐるのである。隨つて「飛ぶ」は「雁」よりも觀念的であり、「雁」は「飛ぶ」よりも文法的であるといへる。然るに今、先後を反轉して「雁飛ぶ」「雁が飛ぶ」などの如くすると、兩者の關係も反對になつて來る。即ち「雁」は「飛ぶ」動作の主體を指標する爲の要素で、「飛ぶ」に比べて觀念的であり、「飛ぶ」はこの陳述の文法的責任を負擔してゐる要素であるから、「雁」に比べて文法的である。「雁を見る」「雁に問ふ」「雁と遊ぶ」などの如くすれば、兩者の關係が更に明瞭になる。「雁を」「雁に」「雁と」などは總てより觀念的であり、「見る」「問ふ」「遊ぶ」などは總てより文法的である。「雁の友」「雁の涙」などの如きものでは兩者とも實體觀念ではあるが、「雁の」の「の」が利いて、それが「友」とか「涙」とかを限定してゐるのであるから觀念的であり、「友」「涙」は文法的であるといはなければならぬ。「雁と雲」「雁や燕」の如き結合に於てすら、かやうな傾があるのである。

次に、今少しく大きな要素單位の結合を取扱つて考へてみよう。例へば「餘念なく本を讀む」に於て、「餘念なく」と「本を讀む」との二要素に分析することができるが、「餘念なく」は「本を讀む」有樣を限定してゐるのであるから、より觀念的であり、「本を讀む」はこの陳述の主要部であるからより文法的であると考へなければならぬ。又「餘念なく本を讀む彼」とすれば、「餘念なく本を讀む」と「彼」とに差當り分析することが出來、前者は後者に比べて觀念的であり、後者は前者に比べて文法的であると言へる。反對に「彼は餘念なく本を讀む」とすれば關係が逆轉する。こゝに注意しなければならぬのは、かやうな結合を「彼は……本を讀む」と「餘念なく」との如く分析してはならぬことである。それは主述の關係に執はれた西洋流の考へ方である。こゝでは先づ「彼は」と「餘念なく本を讀む」とに分析し、然る後「餘念なく」と「本を讀む」とに分析して考へて行かなければならないのである。隨つて「象は體大なり」「象は鼻が長い」の如きものでも、先づ「象は」とそれ以下とに分析して考へなければならない。卽ち「象は（鼻が）長い」のやうなやり方ではなく（象は）＋（鼻が）＋（長い）の如く分析して、次々にその先行後行の相關々係を考へて行かなければならないのである。かやうなことに就いては又更めて述べることとし、次に「駒がいさめば花が散る」の如きものは「駒がいさめば」と「花が散る」の二要素に先づ分析し得るが、前者は後者の條件を述べてゐるものであり、後者は前者を受け文法的終結を成してゐるものである。隨つて「駒がいさめば」の方はより觀念的であり、「花が散る」の方はより文法的であると言はなければならぬ。「駒はいさめど花散らず」「駒がいさむと花が散る」の如きものでも同樣である。先行要素は複雜な觀念活動の爲に加へられたものであり、後行要素は叙述の文法的責任を取つてゐる。かやうなことが又「駒はいさみて花は散る」「駒

もいさむし花も散る」の如き結合に於てすら、稀薄ながら認めることができるのである。即ち先行要素は後行要素に只重加せられてゐるのであるが、矢張前者は觀念活動の分化を表現せんが爲に加へられたものであり、後者は基體的なものとして文法的責任を取つてゐるのである。

今度はずつと細部に目を注いでみよう。例へば「雁の涙」「花が散る」「本を讀む」などの如きものは先づ（雁の）＋（涙）、（花が）＋（散る）、（本を）＋（讀む）などの如く分析し得る結合と見なければならぬが、その先行的なるものは更に（雁）＋（の）、（花）＋（が）、（本）＋（を）の如き結合と見ることができる。この場合、先行の「雁」「花」「本」などは實體觀念を示すものであるから、勿論觀念的である。しかして後行の「の」「が」「を」などは、それらの實體觀念が種々の關係を以て後方に連續すべき機能を示してゐるものであるから文法的であると言はなければならぬ。「駒は……」「花も……」「本ばかり……」などに於ても同樣（駒）＋（は）、（花）＋（も）、（本）＋（ばかり）と見、先行素は觀念的であり、後行素は文法的であると考へなければならぬ。「駒がいさめば……」「駒もいさむし……」の如きものも、先づ（駒が）＋（いさめば）、（駒も）＋（いさむし）の如き結合と見なければならぬが、その後行的のものは更に（いさめ）＋（ば）、（いさむ）＋（し）の如き結合と見ることが出來る。しかして、「勇む」は動作觀念を表すものであるから、勿論觀念的であり、「ば」「し」などは後の陳述に連續せしめる機能を示すものであるから、文法的である。更に今少しく構造の內部に立入つて考へてみると、例へば「靜まられよ」「行かうか」などの如きものは、先づ（靜まられ）＋（よ）、（行かう）＋（か）のやうな結合と見なければならぬが、更にその先行部は、（靜ま）＋（られ）、（行か）＋（う）の如き結合と見ることが出來、先行素は動作觀念を表し觀念的であり、後行素は

その文法機能を延展する性質のもので文法的である。「思ひつ(かし)」「見るべき(に)あらず(や)」「來た(ね)」「數へられる(くらゐ)」の如きものも皆同様に考へることができる。先行的な「思ひ」「見る」「あら」「來」「數へ」等は觀念的であり、後行的な「つ」「べき」「ず」「た」「られる」等は文法的である。更に内部へ進んで、「行く」「讀む」「死ぬ」の如きものでは、語それ自身に於てもかやうなことが見られる。即ち「行」「讀」「死」の如き語幹は觀念的部分であり、「く」「む」「ぬ」の如き語尾は文法的部分である。「白し」「白い」「美しい」などもそれぞれ(白)+(し)、(白)+(い)、(美し)+(い)であるが、文語の「美し」「悲し」「樂し」等はゼロ語尾であり、隨つて文法的部分は消極的である。かやうな事から「花」「鳥」「山」「水」「これ」「それ」「私」等の語も一般にゼロ文法部的と考へることができる。故に「花咲く」「これ買ふ」などとも言へるのである。右は語幹對語尾の問題であつたが、更に語幹の内部に立入つてかやうなことを考へることができる。「春めく」「黄ばむ」「いやがる」などは語幹と語尾とに分析すれば大體(春め)+(く)、(黄ば)+(む)、(いやが)+(る)の如くであらうが(或は haru-mek-u, kibam-u, iyagar-u)普通はかやうな分析を取らず、(春)+(めく)、(黄)+(ばむ)、(いや)+(がる)の如くするであらう。言ふまでもなく兩者はそれ〴〵の立場に於て正しい。只後者は語幹の境域内にも入りこんで、語根對接辭の問題を取扱つてゐるのである。しかして此の場合も先行素である語根は觀念的であり、後行素である接辭は文法的である。かやうなことは「善さ」「眠け」「花やか」「たひらか」などは勿論「神さま」「兄さん」「汝ら」「私ども」の如きものに於ても認めなければならない。右の如く語根を先行部とする後行的な接辭に對して、語根を突破し先行的となつた接辭がある。前者を接尾辭とすれば、これは接頭辭である。隨つて接頭辭は(さ)+(夜)、

（み）＋（位）、（お）＋（願）、（か）＋（弱い）、（お）＋（近い）、（そ）＋（たゝく）のやうに語根に對し常に觀念的である。

日本語に於ける連續法は以上の如き構造原理によつて先づ動くのである。より觀念的な要素は先行し、より文法的な要素は後行し、各要素が齒車の齒のやうに嚙合つて相互に連續結合するのである。しかも其の構造態が如何程多樣に複雜化し、深化せる場合と雖も常にかゝる原理性を保持してゐるのである。論理的文法體系は先づかゝる構造原理を解析するところから形造られて行くものでなければならぬ。一體、言語が連續するといふことは如何にして行はれるものであるか。それは常に二單位的結體でなければならぬ。二つの單位が集合して一つのより高次の單位を形成するといふことでなければならぬ。かゝる二が一となるといふ裡には、又必ず一が二となるといふことがなければならぬ。即ち綜合の裡には分析がなければならぬ。故に、言語が連續するといふことは一が二に分析せられ二が一に綜合せられる過程の全一と見なければならぬのである。之は言語ばかりではなく、總て理智的媒介によつて構成せられるためには常に斯く分析綜合の過程を通らなければならぬ。しかして分析綜合といふことは種々に考へることができるであらうが、究極に於て矛盾關係の取扱でなければならぬ。矛盾せるものを析出し、矛盾を超えて結合して行くことでなければならぬ。神的攝理の代辨とも見るべき知性の眞義はかやうなところにあるのである。しかして眞の矛盾關係は、二つのものの間に成立つものでなければならぬ。單一なものや雜多なものの間に於て直ちに之を求めようとするならば、それこそ矛盾の業である。かくて理智的機構といふものは一般に二股的でなければならぬのであるが、言語の如きものも、そこに理智的媒介作用が何等かの形で働いてゐる以上は、かやうな

ことがなければならぬ。勿論言語に於ては、それが個人的思惟や論理理性を超越し、その基體となる論理的習慣體制とか制約論理などとも稱すべきものであるが、原本的なる二股的性格から洩れるものではない。言語の連續は如何なる場合と雖も二單位的に相關係して行くものでなければならぬ。例へば「象は鼻が長い」の如きものでも、三盡位の同時的結合の如く見るから種々困難な問題が惹起するのであつて、之を二單位的累加と見れば何も特別に問題がないのである。「彼は餘念なく本を讀む」の如きものも(彼は)+〔(餘念)+(なく)〕+〔(本を)+(讀む)〕〕の如く、(本を)+(讀む)に(餘念)+(なく)が觀念的に關係し、その結合體に對して(彼は)の主體觀念が係つてゐるものと見なければならない。又「遙かに遠く飛ぶ雁」では〔〔(遙かに)+(遠く)〕+(飛ぶ)〕+(雁)の如く、(遙かに)+(遠く)が(飛ぶ)を限定し、其の二累的結合體が(雁)を限定してゐるものと見なければならない。更にそれのみではなく、「象は」「鼻が」「彼は」「本を」「遙かに」なども(象)+(は)、(鼻)+(が)、(彼)+(は)、(本)+(を)、(遙か)+(に)の如きものとして見なければならず、「長い」「なく」「遠く」「讀む」「飛ぶ」なども(長)+(い)、(な)+(く)、(遠)+(く)、(讀)+(む)、(飛)+(ぶ)の如きものとして見なければならない。かやうなことに就いて今少しく進んで考へてみると、「長いよ」「讀むと」「飛べば」などでは〔(長)+(い)〕+(よ)、〔(讀)+(む)〕+(と)、〔(飛)+(べ)〕+(ば)の如きものとして見なければならず、「讀まう」「飛んだ」などでは〔(讀)+(ま)〕+(う)、〔(飛)+(ん)〕+(だ)の如きものとして見なければならない。又「象などは」「鼻がね」「彼には」などでは〔(象)+(など)〕+(は)、〔(鼻)+(が)〕+(ね)、〔(彼)+(に)〕+(は)の如きものとして見なければならず、「讀まうか」「飛んだよ」「行かなければ」などでは〔〔(讀)+(ま)〕+(う)〕+(か)、〔〔(飛)+(ん)〕+(だ)〕+(よ)、〔〔(行)+

(か)}＋(なけれ)}＋(ば) の如きものとして見なければならない。かやうなことを更に微細に進めることもできる。例へば「なけれ」なども(な)＋(けれ) 乃至 nak-ere であり、又語根と接辭の問題も控へてゐる。反對に上位的なものを考へれば尙更止むところを知らない。例へば「象は體が大きく、鼻が長い」。とか「彼は餘念なく本を讀んでゐたが、私は只茫然と窓外の景色に見とれてゐた」。などの如く廣げて行くことができるのである。之を更に

象は體が大きい。さうして鼻が長い。

彼は餘念なく本を讀んでゐた。然るに私は只茫然と窓外の景色に見とれてゐた。

の如く連結を一旦斷切しても、尙接續的な言葉を用ひなどして、後行的なものが先行的なるものを承けてゐる以上、かやうな關係を考へることは不可能ではない。

以上の如く言語の連續法は上位的にも下位的にも際限なき二股的重疊と見ることができる。言語連續法は二單位的累加相である。こゝに於て私は、言語の時間性の問題につき考察を施し、かやうなことを一層明瞭にして行きたいと思ふ。普通に言語の時間性といへば、話線の如きものを考へてゐるのである。言表が發音操作により外的實在界に描畫されて行く、線條的なものを考へてゐるのである。先行後行などといふことも、かやうな線條的時式の上で考へられたものに過ぎない。しかし、線條的時式といふものは謂はゞ眞の言語時間の一面に過ぎない。平面上に投影せられ、空間化せられた時式に過ぎない。言語の眞の時間性にはそれ〴〵に奥行がなければならぬ。單に平面上に描かれ行くものではなく、立體の奥を駈けめぐる底のものでなければならない。複合的相貌を呈するものでなければならない。但し、こゝで私の言はんとしてゐるところはバイイの言ふ反序性 (dystaxie) の如きものではな

い。それは、序列せられた各々の部分の多義性を問題にしてゐるもの、文法事實に對する語彙的纏綿を反省せるもので、全然無關係のものでなければならぬ。寧ろ、かゝる語彙的纏綿を排除し、而も尙殘る反序性的なものを認識して行かなければならぬ。それは如何なるものであるか。言語の時間性に就いて、線條時式の上に如何なるものを考へて行かなければならぬか。嚮に「象は鼻が長い」の如きものの分析は三單位の同時的結合としてではなく、（象は）＋｛（鼻が）＋（長い）｝の如く二單位的累加相として考へなければならぬと言つた。之を單なる語辭の線條的接踵と見れば、當然その連續相は三單位の同時的結合と考へなければならぬ。しかし（象は）＋（鼻が長い）の結合と（鼻が）＋（長い）の結合とは同一時式面の上で行はれてゐるものではなく、（象は）＋（鼻が長い）の方は發言の現實に近接し（鼻が）＋（長い）の方はより過去的である。勿論立言的過程そのものから言へば、前者の如き全體表象的なものに關する結合は後者の如き部分表象的なものに關する結合に先立つとも言へよう。しかし所與的材料的言語から言へば、右の如く言はなければならぬのである。言としての論理的機構は部分の前に全體があり、言語としての論理的機構は全體の前に部分が與へられてゐるのである。故に（象は）＋（鼻が長い）の結合は差當つての立言的現實面に近接してをり、（鼻が）＋（長い）はその內奧に後退せるところで結合し過去的と見なければならぬ。（象）＋（は）、（鼻）＋（が）などとなると更に過去的なものであり、（長）＋（い）に至つては共時的領域より通時的領域に入り込んでゐる。即ちより現在的なものから、より過去的なものへと排列してみれば略ゝ

（象は）＋（鼻が長い）：（鼻が）＋（長い）：（象）＋（は）：（長い）……
（鼻）＋（が）

の如くである。念の爲別の例を二三擧げれば、「彼は餘念なく本を讀む」では

（彼は）＋（餘念なく本を讀む）：（餘念なく）＋（本を讀む）：（餘念）＋（なく）：（彼）＋（は）：（な）＋（く）……
（本を）＋（讀む）（本）＋（を）（讀）＋（む）

の如くであり、「駒がいさめば花が散る」では

（駒がいさめば）＋（花が散る）：（駒が）＋（いさめば）：（駒）＋（が）：（いさ）＋（め）……
（花が）＋（散る）（花）＋（が）（散）＋（る）
（いさめ）＋（ば）

の如くであり、又「いと遙かに遠く飛ぶ雁」では

（いと遙かに遠く飛ぶ）＋（雁）：（いと遙かに遠く）＋（飛ぶ）：（いと遙かに）＋（遠く）：（いと）＋（遙かに）：
（遙かに）＋（に）：（遠）＋（く）……
（飛）＋（ぶ）

の如くである。かやうに連續言語の構造を貫ぬく時間性は單に線條的平面的なものではなく、言語接踵の現實面の奥に動く種々の時間の複合群聚によるものである。それらの中には殆んど通時的領域に入り込み、共時的過去の極限へ到達せんとするものもあり、又一方立言的周邊よりその中樞部に近迫し、共時的現在の尖端に到達せんとするものもある。前者は語彙性への道行であり、後者は言表性への道行である。前者の方向を徹底すれば遂に文法事實の化石を拾ふことになるであらうが、後者の方向を徹底すれば生動せる文法力の眞の現在點に觸れるであらう。然らばかゝる現在點は何であるか。私はそれは連續の絶するところ、即ち斷止點より外に求めることが出來まいと思

ふ。斷止點こそ種々の過去的なものゝ一切を背負ひ、非文法的世界を凝視する眞の現在點である。連續を雜多な過去の累層とすれば、斷止點はかゝる過去的重荷の凝集する現在の尖端であり、その外は文法未成の未來でなければならぬ。斷止とは如何なるところであつたか。それは文の生產せられる地點であつた。文とは何か。文は文法現象の宇宙であり、文法事實の生ひ出る大地である。それは如何なることを意味するか。それは文は文法の極限であり、二次的言語の極限として一次的言語語彙的言語に面接し、それを一歩出れば軈て言語の領域を越え言の領域へ逸脫して行くことでなければならぬ。しかして其處は非文法的であり、文法の眞の未來である。故に言語の斷止するところは、言語時性の眞の現在點として文を成立せしめ、かくて種々の過去を負ひ未來を孕み、文法力の最も躍動せる生命點でなければならぬ。

言語の連續は、斷止の現在點に並列する語辭接踵の線條時式の內奧に、より現在的なものからより過去的なものといふやうにそれ〴〵位置を占める累層態である。しかしてかゝる連續群聚の單位的なものは要素の二股的結體であり、隨つて連續法は一般に二單位的重疊であると言ふのである。日本語では特にその二股的結體に於ける先行素は、より觀念的であり後行素はより文法的である。之は嚮にも例證したやうに殆んど例外なく行はれてゐるもので、實に日本語の構造性を貫ぬく根本原理ともいふべきものである。日本語の構造性を認識せんとするものは　先づかゝる根本原理を把握し、その眞義につき理會體得しなければならぬのである。卽ち言語一般の構造原理は二股的重疊であると考へることが出來るが、その單位を成す二股的結體の一つ〳〵をよく檢討してみると

1、先行素がより觀念的にして後行素がより文法的なるもの

2、先行素がより文法的にして後行素がより觀念的なるもの

の二種類に盡きる。しかして多くの言語は1と2との混合方式をとるのであるが、日本語は徹底的に1の方式のみを守り通して行く言語である。日本語の連續法は、如何なる場合でも何等かの形で、先行素がより觀念的であり後行素がより文法的である。かやうなことは如何なることを意味するのであらうか。一體、日本語はかゝる言語構造ばかりではなく、音韻構造に於ても之と略〻同樣な狀態を見ることができるのである。例へば音節の構造を見るに、それが開音節などと謂はれてゐる如く、音の特異相を形造る子音は先行的であり基本的な母音が後行的である。子音母音の本質はフェニキア字母などに於て容易に推察することができるであらう。卽ちフェニキア字母では、子音はそれ〴〵特殊の文字で示されてゐるが母音は多く無記號的である。それがギリシャに至つて漸く母音にも子音同樣に正規の記號を充當するやうになり、後、大多數の文明民族に採用されたのである。之は取りも直さず、子音は音の特異相を表徵するものであるから夙くから認定されたのであつたが、母音は音の基調をなすものであるだけに、つい見のがされたものと見なければならぬ。言語の音相といふものは一般に母音の水面に見る子音のせゝらぎの如きものに外ならない。しかして日本語の音節構造は、普通、子音が先行的であり母音が後行的である。かゝる音韻的構造性は矢張日本語の言語構造性と相呼應するものといはなければならぬ。更にかやうな見地から、各音韻の發音的操作を生理的物理的に實驗調査してみれば、或は面白い結果が得られるかも知れない。又一方語音の構成法に就いても、何等かの法則性を見出すことができないとも限らない。言表機構に於ても、日本人はとかくかやうな道を辿る傾向があるやうに思ふ。

あんたは、お若いのに感心だねえ……斯う見えても、昔はねえ……。だが、今ちや、おたまも鼠みたいに、地下室にもぐつてゐますさア……浮世とは、さうしたものさ……

こんな例はそこいらの井戸端會議などから、ざらに拾ふことができるであらう、さうして、「浮世とはさうしたものさ……」などと言つた極文句の述懐で談話の結末がつけられることが多い。素朴な古代文學ではかやうなことがもつと露骨である。

み吉野の耳我の嶺に
　　時なくぞ雪は降りける、
　　ひまなくぞ雨は降りける。
その雪の時なきがごと
その雨のひまなきがごと
隈もおろず思ひつゝぞこし、
　　その山道を。

の如きものでは、前の五句は單なる題辭的修飾部分であり、吟咏の意思は後の二句に存するのである。とは言へ、前の五句の如きものは文學構築上極めて重要な意義を持つものと言はなければならぬ。枕詞とか序詞とかといふものは、かやうなものが固形化し習慣的となつたものである。祝詞形式の如きも之と略〻同樣に考へて差支がない。即ち、先行的には祭祀の本緣來歷等を語る神話的部分があり、之を承けて後行的には神德を稱へ幣帛を奉り祈願の

趣旨を述べる祈禱的部分があるのである。更に物語とか軍記とか謠曲等に於ても、かやうなことが明かに認めることができるのである。以上のやうなことはそれを語る國民の性格と深い聯關があるものと考へなければならぬ。始めは結論的なことを差控へ口籠つてゐて、あらゆる方面から言辭を整へて置き、最後にこだはることなくさらりと表白して退けるといふ態度、或は主我的な陳辯をあからさまに、ことごとしく述べ立てるやうなことを成可く避けようとする心遣、或は容易に言擧せぬ奥ゆかしい謙虛、かやうな理智の働き方が眞の和魂の形相であると思ふ。大和魂の本領はまことであると謂はれてゐる。まことは眞事であり眞言である。しかして眞の事行、眞の言辭を致すには我を捨て主我を沒し、眞に死して生きるといつたまことの心、眞心でなければならぬ。誠心誠意でなければならぬ。誠實でなければならぬ。之に就いて、我が國では先づ主我性主觀性を前に出さぬといふことが民族的理性とも言ふべきものとして常に庶幾せられて來た。さうしてそれが文學樣式の上にも日常的な言葉の行り方の上にも表れ、引いては言語構造の根本原理ともいふべきものとして働き、且音韻や發音操作の末々にまで泌み込んでゐるものであらうと思ふ。

## 四

日本語の構造性は、先行的には觀念素、後行的には文法素が結合する二股的累加と見なければならぬが、併しそれらの間に又種々のものを考へて行かなければならぬ　先づ第一に區別しなければならないのは、觀念的展開のための構造性と文法的發展のための構造性とである　例へば

（遙かに）――（遠く）――（飛ぶ）――（雁）

（父は）――（子に）――（財産を）――（譲る）

（花咲き）――（鳥啼く）

の如きものは前者であり

（譲ら）――（ざれ）――（ば）　（財産）――（を）――（すら）

（飛ば）――（せ）――（ませ）――（う）――（か）　（孫）――（に）――（でも）

（遙か）――（に）――（も）

の如きものは後者である。即ち前者は専ら観念活動の複雑相を表現せんがために展敍せられたものであり、後者は専ら文法活動の複雑相を表示せんがために延展せられたものである。今前者の如きものを假りに観念的構造と稱し、後者の如きものを文法的構造と稱して置く。しかし、観念的構造内に在つても

（遙かに）＞（遠く）＞（飛ぶ）＞（雁）

の如く、先行的のものはより観念的であり

（遙かに）＜（遠く）＜（飛ぶ）＜（雁）

の如く、後行的のものはより文法的であることは言ふまでもない。又文法的構造内に在つても同様

（飛ば）＞（せ）＞（ませ）＞（う）＞（か）

の如く、先行的のものはより観念的であり

（ア段）＜（イ）＜（ウ段）＜（う）＜（お）

の如く、後行的のものはより文法的である。

觀念的構造とか文法的構造とかといふことは、構造性の內面的見地或は所記面から斯く稱したのであるが、之を外面的見地或は能記面から言へば、前者は先行的構造、後者は後行的構造などと稱せらるべきものである。卽ち今話線を基準にして考へると、觀念的構造の方向は話線の方向に逆行し、文法的構造の方向は話線の方向に順行するのである。話線といふのは嚮にも多少觸れたやうに、言表が發音操作によつて外的實在界に描かれて行くことであるが、日本語では觀念の展開方向が之に逆行的であり、文法の發展方向は之に順行的である。隨つて文法活動は話線に便乘してどこまでも發展して行くといふ傾向があるが、觀念活動はかゝる言語の構造性の爲に動もすれば話線に壓迫され勝である。こゝに於て、日本語の音節が母音の後行的なるため語音が母音の水面に立つ子音のせゝらぎの如く聞えるやうに、日本語の構造に於て文法的なるものが後行的である關係上、言表は文法の海に起伏する觀念のさゞ波といつた景觀を呈し易いのである。故に日本語は、言語としては可成强靱で同化力包容力に富み發展的進取的であり、一面又纖細なる情緒や閑寂優雅な趣を捉へ得る特徵があるが、言辭の莊嚴を誇る雄大な文學や、論理の精緻を誇る深遠な哲學を語るに不適當であるかも知れぬ。しかし、我々は哀感とか俳味とかといつたやうなものにのみ滿足してゐたり、或は强ひてその純一性を固執せんとする如き偏狹な態度に嚴正な檢討を加へ、もつと積極的に國語といふものゝ眞の將來性を考へ、諸種の外來語の如きものをも自由に攝取して、思ふ存分之を鍛へて行けば、偉大なる東洋語として世界に君臨することができる日が來るのではないかと思ふ。新しい日本文化の創造は新

しい日本語の創造と不可分離である。國語愛護の眞義はかやうなところにも在るのでなからうか。

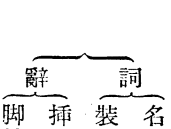
右に述べた如き日本語の二大構造性に從ひ、個々の言語は二つの範類の中にそれ〴〵分れて行く。即ち觀念的機構の直接的材料となるものと、文法的機構の直接的材料となるものとである。例へば「遙かに遠く飛ぶ雁」の「遙か」「遠く」「飛ぶ」「雁」の如きものは前者であり、「飛ばせませうか」の「せ」「ませ」「う」「か」の如きものは後者である。「象は鼻が長い」に於て「象」「鼻」「長い」は前者であり、「は」「が」は後者である。前者は觀念語とも稱すべきものであり、後者は文法語とも稱すべきものである。しかして觀念語は常に文法語に先行し、文法語は常に觀念語に後行し、兩者は相補關係にあるのである。故に觀念語を先行語、文法語を後行語などと言つてもよい。現に富士谷成章などは後者の如きものを脚結と稱してゐるのである。即ち構造性の場合と同樣、內面的見地或は所記面からは觀念語と文法語とであり、外面的見地或は能記面からは先行語と後行語とである。しかして觀念語自體にも「飛ぶ」「讀む」「赤い」「美しい」の「ぶ」「む」「い」の如く文法機能を表示する部分があり、しかも之等は何れも語の後方部にのみある。又「雁」「彼」「百」の如きものも、ゼロ度に之を有するものと見なければならぬ。同樣文法語にも「せる」「れる」「たい」などでは、文法部に先行し觀念部的なものを認めることができる。「ばかり」「まで」「だけ」などは、觀念部は比較的明瞭であるが、文法部はゼロ度である。更に「の」「が」「を」「に」「と」「へ」「は」「も」の如きものとなると、全く兩部が合融した形となつてゐる。しかし、原理的には兩部の區別を考へなければならない。かやうに觀念語文法語それ自身に於ても、先行的な部分と後行的な部分とが區別せられるのであるが、前者は觀念部とか意義部とか或は先行部、後者は文法部とか形態部とか、或は後行部などと稱せら

るべきものである。

以上の如き觀念語と文法語、乃至は意義部と形態部との區別は、我が國では已に古い歴史を有してゐる。その最初は、奈良朝前後に於て漢文訓讀といふことが創始せられ、又漢字を以て國語を表記する方法が考案せらるゝに當り、彼我の言語的構造性の相違が意識せられて、國語の文法的要素の多くに特別の取扱をしなければならないことがわかつた時である。その中漢字を以て國語文を表記する方法は、結局宣命書などと言つた技術的なもので終つてしまつたやうであるが、漢文訓讀の方法は現存の點圖などに見られるやうに、點法とも稱すべき一種の組織に進展してゐたのである。かやうなものを承け、之を眞に日本語の上で見る立場に立つたものが中世の歌學であると言へる。しかし、歌學的認識に於ては手爾波大概鈔などに見られるやうに。そのことばとてにをはとの區分原理は漢文訓讀の點法とも異なり、又現在普通に考へられてゐるものとも異なる。かやうな區分原理を、後に至つて鈴木朗がその言語四種論に於て展開せしめてゐる。即ち彼は、ことばは物事を指す言語の客觀的要素、てにをはは心の聲即ち言語の主觀的要素であると考へてゐるのである。かやうな區分原理を定立することが出來たといふことは、言語に對して極めて鋭い直觀力を有して居たと言はなければならぬが、しかし「獨立チテ詞ヲ離レタルテニヲハ」「詞ニ先タツテニヲハ」の如きことを言つてゐるところから見ると、眞に言語の主觀的要素と稱せらるべきものと、然らずして單に言主の主觀的狀態を表示するものとを混同して考へてゐたやうに思ふ。眞に指すところなきものと、未だ何等か指すところあるものとを同一範疇に入れて考へてゐたと思ふ。前者は社會的歴史的なる言語そのものの主觀性を直ちに表示することを本體とするものであり、後者は個々の言樂の主觀的狀態を吐露することを本體とす

るものであつて、兩者は明かに區別しなければならぬ筈のものである。近世の本居派の考へ方といふものは、大體中世の歌學者流の考へ方を繼承發展せしめたものであるが、更に之を合理的に組織立て體系づけようとする傾向に進んで行つた。言ふまでもなく、此の推進力となつたものは宣長の紐鏡とか玉の緒とかといふやうなもの、或は春庭の八衢や通路の如きものであつたが、之等は何れも單なる事例の羅列ではなくて、常に何等かの範式を立て法則的なものを設定しようとしてゐるのである。かくて詞と辭との區別の如きも、前者を言語の非法則的な質料的要素の如く考へ、後者を言語の法則的な形相的要素の如く考へてゐたやうである。しかし、それも前代の歌學的な考へ方を超脱せざる限り未だ雜駁なるものに過ぎず、殊に權田直助の語學自在に至つても尙、下辭に對し上辭といふものを設け、而も面白い事には此の上辭を又體言の中に入れてゐる。之がやがて岡澤鉦次郎氏の準體言などといふものになる道行である。とは言へ、詞と辭との區分內容が今日一般に考へられてゐる如きものとなるには、その間に西洋文典の介入がなければならなかつた。西洋文典による長き鍛錬を經て今日普通に考へられてゐる如き詞と辭、ことばとてにをはとの區別意識が成立したのである。しかし翻つて考へてみるに、かゝる西洋文典の流入がなくとも、實は中世の歌學的文法學の殿將ともいふべき栂井道敏などは已に、かやうなことが明瞭に分つてゐたやうである。それらを承けて實に秩序ある體系を定立し、偉大な業績を殘したのが富士谷成章であつた。西洋文典などといふものよりは、源流をこゝに求めなければならないのである。然るに惜むらくはその眞價を認識して之を紹述するものはなく、只徒に過去の一業績として殘されて來てゐたのである。ひとり山田孝雄博士は夙くからよくその眞義を洞察せられ、之をその文法學說に採用せられたのであるが、それ以來漸く世人の注目するところとなり、今日で

は誰しも成章の深遠なる學理を了解し得るやうになつたのである。しかし、成章が「あゆひ抄」の「おほむね上」に於て「名を以て物をことわり、裝をもて事をさだめ、挿頭脚結を以て言葉を助く」などと言つてゐる文脈から察すれば、或は



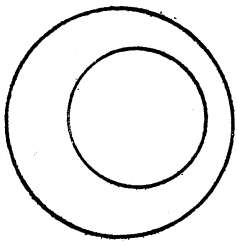

の如く考へてゐたやうにも思はれ、ともかく原理的には中世的なものを拔け切つてゐないのではないかと思ふ。山田博士は之等の缺點を修補せられ、更に脚結の中から接尾辭の如きものは勿論、普通に助動詞と稱せられてゐる複語尾をも撤去せられて、之を關係語として觀念語に對立せしめられたのである。しかし私は嚮に述べた如き關係によつて、山田博士が挿頭的なものを觀念語の中に包攝せしめられ、副用語として自用語に對立せしめられたことに對しては滿腔の贊意を表するものであるが、脚結に就いては大體に於て成章の考へてゐたものの方がよいのではないかと思ふ。脚結といふその名の示す通り、成章は先行的要素に對して後行的要素といふことを考へ、それらを一括しようとしたものであらうと思ふ。先行的要素後行的要素といふ考と共に、又觀念的要素文法的要素といふ考が併存してゐる。例へば裝に對する取扱がそれである。之は言ふまでもなく、中世のてにをはの考へ方に系統をひくものである。しかし、それは裝そのものを問題としてゐるのではなく、視點はその語尾に在るのである。一般に中

世歌學のてにをはに對する考へ方といふものはヴァンドリエスなどの言ふ sémantèmes に對する morphèmes の考へ方に似てゐる。しかし獨立的材料である語と、その語の部分とは區別しなければならないのである。又挿頭の如きものを、てにをはとか辭とかいふやうなものの中に包含せしめる考へ方は、中世近世に通ずる文法學の癌であるが、之は嚮にも述べた如く、客觀的要素に對する主觀的要素といふ考へ方が不徹底であつたことに起因するものであつて、はつきり訂正して置かねばならないのである。

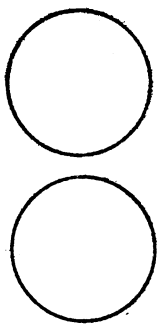
## 五

日本語の構造性の根本原理は、先行素がより觀念的であり、後行素がより文法的であるといふことであり、それが分れて先行的に働く觀念的構造と、後行的に働く文法的構造とになるのであるが、それらにも亦種々の區別をしなければならぬ。觀念的構造にも文法的構造にも、それ〴〵種々の構造的性格が考へられるのである。そこで先づ前者の方から考察して行く。

或觀念的要素が他の或觀念的要素に先行し之と相關係するには、先づ一が他に從屬するか或は兩者が對立のまゝであるか、二つの中の何れかでなければならない。前者を從屬關係にある構造、後者を對立關係にある構造と稱して置く。從屬關係には又異なる二つのものを區別しなければならない。例へば「白い月」「少し白い」「白く光る」「光る月」「月の光」の如き關係は先行素が後行素を修飾限定してゐるのである。即ち「白い」といふ觀念が「月」の屬性を限定し「少し」といふ觀念が「白い」といふ觀念の程度を限定し、「白く」といふ觀念が「光る」といふ

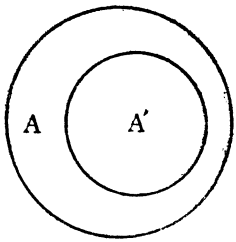


（從　屬）

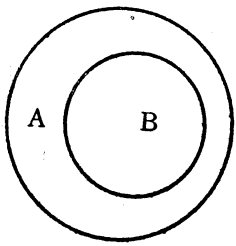


（對　立）

現象の有様を限定し「光る」といふ觀念が「月」の有様を限定し「月の」といふ觀念が「光」といふ實體を限定してゐるのである。又「五時に起きる」「空を飛ぶ」「大阪へ行く」「筆で書く」の如き關係は先行素が後行素を補充してゐるのである。即ち「五時に」「空を」「大阪へ」「筆で」の如き實體觀念が種々の仕方で、後行の「起きる」とか「飛ぶ」とか「行く」とか「書く」とか言つた動作觀念を補充してゐるのである。かやうに同じく從屬關係の中でも、前者は先行要素が後行要素に內屬する關係であり、後者は先行要素が後行要素に外附する關係である。前者を修飾關係にある構造、後者を補充關係にある構造と稱して置く。對立關係にも亦異なるものを區別しなければならぬ。例へば「甲は甲である」「これは間違だ」「君の帽子はどれですか」「見事な花が咲いた」の如き關係は、先行素が後行素に對立し乍ら一に統合せられてゐるのである。即ち




（修　飾）

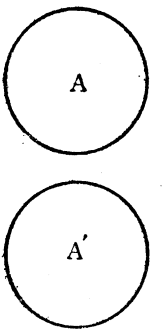



（補　充）

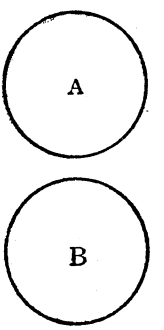
（甲）：（甲）　　（これ）：（間違）

（君の帽子）：（どれ）　　（見事な花）：（咲く）

の如く一應は對立し乍らも、直ちにコプラ的に統一せられ命題の形を成すものである。又「甲と乙と……」「梅も桃も李も……」「花咲き鳥啼く」の如き關係は、先行素が後行素に單に並列せられてゐるものである。並列と言つても勿論その間には種々のものがあるのであるが、ともかく前者の如く、先行要素が後行要素に對結し一つの新な思想を成立せしめる如きものでなく、兩者が只對立的に結合してゐるに過ぎない。前者を統合關係にある構造、後者を並列關係にある構造と稱して置く。かくして觀念的構造或は先行的構造といふものゝ大綱は大略次の如きものであると考へる。




（統　合）




（並　列）

- 觀念的構造
  - 從屬關係
    - 修飾關係
    - 補充關係
  - 對立關係
    - 統合關係
    - 並列關係

しかして之を更に細別すれば、又種々のものに分れて行くのであるが、それらは皆外的表徴として然るべき樣々の文法的要素が添加せられ、何れも言語としての面目を保つてゐるのである。即ち觀念的構造一般は先行的展開といふ語序的外表を執るのであるが、その細別は語形變化とか膠着素とかといふ實質的外表を執ることによつて行はれるのである。之等に就いては又後で述べることゝする。

かやうな言語の觀念的要素の相關々係につき夙くから着眼してゐたのは、イェスペルセンであらうと思ふ。周知の如くイェスペルセンはその著文法哲學第八章に於て junction と nexus に就いて述べてゐる。junction といふのは、例へば

a very beautiful lake

a furiously barking dog

の如きものであつて、それ〴〵一個の idea を表示するため、very とか beautiful とか或は furiously とか barking とかといふ觀念語を先行せしめてゐるのである。かやうなものが

The lake is very beautiful.

The dog barks furiously.

となれば、それは nexus である。即ち lake といふ實體と beautiful といふ情景、dog といふ實體と barks といふ動作とはそれ〴〵別個の ideas として對立的に結合してゐるのである。前者は私の言ふ修飾關係であり、後者は統合關係である。しかしこの二つだけで言語の觀念的構造といふものは完全に說明ができぬ。勿論、junction と

nexus とは言語の觀念的要素關係中最も特色的で重要なものに相違ないが、之を以て總てを統率しようとすることは可成無理であらう。それよりも松下大三郎氏の

- 從屬關係
  - 連用的關係
    - 補用的關係
      - 主客的關係
        - 主體的關係……主語と敍述語
        - 客體的關係……客語と歸着語
      - 實質的關係……補語と形式語
    - 修用的關係……修用語と被修用語
  - 連體的關係……連體語と被連體語

（改撰標準日本文法・六三九頁照）

の如き考へ方は日本語に關する限り適當であるかも知れぬ。しかし、かやうな考へ方を押進めて行くと「いと遙かに」「本當に綺麗」の如き連副詞的關係などとも言ふべきものを擧げなければならぬことゝなる。現に森本治吉氏は萬葉集中の格助詞「の」「が」の用法を說明する際、連體的用法、連體的用法と並べて連副詞的用法といふものを擧げてゐる。（萬葉集講座・第三卷一〇六——一一二頁照）又、補用的關係、修用的關係の外に連用的關係の一種として「白く美しい」「通り過ぎる」の如き同格的な關係がある筈である。更に

- 主客的關係
  - 主體的關係
  - 客體的關係

などといふことは、只分類のための分類に過ぎない。この外尙細かい點に就いても言ふべきことがあるが、要する

に論理が未だ事實の眞を貫通してゐないと思ふ。惡くすると遂にイェスペルセンのjunction、私の言ふ修飾關係の如きものに凝縮されてしまふ考へ方かも知れぬ。小林英夫氏が紹介せられたイェルムスレウの一般文法の原理の中に說いてある制辭法（rection は、かやうなことに對し形態論的考察を試みたもので、極めて示唆に富むものである。今之を要約して示せば略〻次の如くである。

一、單純制辭法 rection pure（一致 concordance）

依存要素の形態部が依存關係を特殊化することなく示すに過ぎないもの。

（a）單純一致 concordance pure

依存要素の形態部が單に制辭要素との機能關係を示すに止まり、被制辭項の意義に係はらないもの。

例、性。

（b）複合一致 concordance complexe

依存要素の形態部が單に制辭要素との機能關係を示すにとゞまらず、なほ制辭要素と形態部とその意義を同じくするもの。

例、格、人稱、數、指定、對象活用、「構成語態」。

二、複合制辭法 rection complexe

依存要素の形態部の意義が二重である。即ち(a)依存關係そのもの、(b)その依存關係の特殊的性質。

例、動詞及前置詞における對象辭の制辭法、動詞による副詞の制辭法。（批判的解說一般文法の原理・第二章・第

二節照）

先づ單純一致といふのは、制辭的要素が被修飾的要素で、修飾的要素が被制辭的要素である關係に在るものである。又複合一致といふのは、制辭的要素と被制辭的要素とが同格的に對立する關係に在るものである。之等に對する複合制辭法といふのは、本質的には單純一致に類するものと思はれるが、その間に種々の特殊關係を認め得るものである。即ち、私が嚮に擧げて置いた日本語の觀念的構造と比照して言へば、單純一致は修飾關係、複合一致は統合關係、複合制辭法は補充關係に略〻該當するものである。山田博士の說かれる

主從關係
一致關係
並立關係

は、右のイ゛ルムスレウなどの考へ方と大部分重なり合ひ、一部分に於て喰違ふものであり、又イェスペルセンの junction と nexus とに並立關係を加へた形のものであると考へることができる。山田博士は最初之を

二個物體の關係
- 個々……並立關係
- 合同
  - 同等の資格……一致關係
  - 主從……主從關係

（日本文法講義三一五頁、及び日本口語法講義二二五頁照。日本文法論一三一二頁所載のものは用語上多少異同があるが、同樣の考と見て差支ない。）

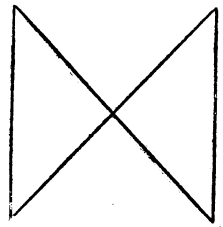
の如く考へて居られたが、最近

二個物體の外延上の關係
- 個別……並立
- 合同……
  - 一致
  - 主從……
  - 對等

二個物體の內包上の關係

（日本文法學概論・六一〇頁照）

の如く、舊來の所謂外延上の考へ方に更に新に內包上の考へ方を結附けて論理の完璧を期して居られる。しかし、對等に個別的對等とも稱すべき並立と合同的對等とも稱すべき一致とがあると同樣に、主從にも合同的な主從の外に個別的な主從もあるのではなからうか。又合同に主從的合同とも稱すべきものと、對等的合同とも稱すべき一致とがあると同樣に、個別にも對等的個別とも稱すべき並立に對し主從的個別とも稱すべきものがあるのではなからうか。之を圖式で表せば次の如くである。




隨つて

個別的對等（對等的個別）……並立
合同的對等（對等的合同）……一致
個別的主從（主從的個別）……（　）
合同的主從（主從的合同）……主從

となり、個別的主從或は主從的個別に當るものがなければならないやうに思ふ。之が卽ちイェルムスレウの複合制辭法に關係あるものであり、私の言ふ補充關係の如きものに外ならない。

しかし、イェルムスレウの制辭法では、並立といふことに對して何等觸れるところがないやうである。こゝに於て私は嚮に擧げた四範疇を立てる譯である。しかしてその中、修飾關係と補充關係とは先行素が後行素に從屬依存するものであるが、前者は內屬的であり、後者は外附的である。又統合關係と並列關係とは先後兩要素の對立關係であるが、前者は copula 的統合素によつて結合せられ命題の形を成し創造的であり、後者は單なる對結である。

以上の如き觀念的構造に從つて、觀念語を種々に範疇づけることができる。先づ、從屬關係の先行部である從屬素としてのみ其の機能を果す從屬語又は修飾語と、相互に獨立的で相對立して結合することに依つてそれ〴〵の機能を果すことを本性とする獨立語、或は對立語とも稱すべきものとに分つことができる。前者は後行する何物かに依存し附庸することに依つてのみ觀念的展開構造に寄與し得る、謂はゞ副用的伴示的な觀念語である。後者は之に反し主用的自示的である。しかし、主用的自示的であるといつても孤立的ではない。孤立語などといふものを立てる人があるが、かやうな事とは全然異なるのである。孤立語などといふことは機能範疇上無意義な概念である。語文の如く語が孤立的に見える場合もあるが、それは現實に於ては早用例の一種に過ぎない。かやうな事を以て語の本質を考へてはならぬのである。しかも、語文も常に何等かの形でそれに文法素が添接してゐるのであるから、全然孤立的と考へることはできない。又獨立語と雖も勿論用法的に他の要素に從屬する場合がある。しかしそれは獨立語相互の關係で、決して從屬語に依存し附庸するやうな事がないのである　之と反對に、從屬語は獨立的に使用せられる場合は絕對にない。從屬語はどこまでも從屬的に使用せられるのである。「どろ〳〵」「どん〳〵」「する〳〵」の如きものや「おや」「まあ」「あゝ」「うん」の如きものは、單にその儘では動物的言語に過ぎない。必

ず何等かの後行素を豫想して發せられるものでなければならない。かゝる獨立語に對する從屬語に就いて、古來多くの學者は誤認してゐた。しかして一般に行はれてゐた考は之をてにをはの一種と見てゐたのであつた。之は嚮にも述べて置いたやうに、言語主觀と言主の主觀とを混同した結果である。かやうな事に矛盾を感じてか、所謂辭の範類から之を排除しようとする傾向になつたのであるが、遂に所謂詞類の中に收められ、而も準體言の如きものと考へられるに至つた。しかし、從屬語を獨立語に準じようとすることは抑々一種の誤魔化しである。從屬語はどこまでも從屬語として論じて行かねばならない。かやうなことを眞に認識して居た最初の人は樗井道敏であると思ふ。彼は「てには網引綱」に於て「近代てにはの諸注に魂を入るてにはとて　たゝ猶　さへ　たに　なと　いとゝ等を出せり。この說いかが。さへ　たに　はてにはにて、唯　猶　なと　いとゝは詞なるを相混して抄出せる、その理なきに似たり。」と論じてゐる。之は言ふまでもなく、言語主觀の表徵である文法語から、觀念語の一類である言主主觀を表徵する從屬語を區別したものである。その後、道敏は「蜘のすがき」に於て「唯」「猶」の如きものを虛字と名づけて說明してゐるのである。しかし、之を一層組織的に展開するに至つたのが富士谷成章である。卽ち彼は言語を名、裝、挿頭、脚結の四類に範類してゐるが、その挿頭と稱するものはつまり從屬語である。しかして「かさし抄」三卷九十六條は之が具體的說明を試みたものである。勿論その一々に就いて詳細に檢討すれば種々の難點もあるにはあるが、文法語としての脚結と區別し、觀念語の一類として名裝等に對立せしめ堂々之に就き一書に纒め上げ、而も常に他の要素に先行して用ひられるといふ特性を認め之をかざしと稱し得た卓見は空前絕後と言つてもよいであらう。

自示的對立的な獨立語に就き、陳述語と實體語とを認めることは比較的容易に行はれたやうである。メイエやヴァンドリエスの如き懷疑的態度を持する人々ですら、動詞と名詞だけは明かに認めてゐるのである。我が國でも已に中世に於て、物の名は詞と異なる言語的要素として分立してゐたやうである。かやうなことが一方成章の名と裝との別に、他方は一般的に行はれた體言用言の二範疇に發展して行つたのである。しかし、體用の別も後には語形變化の有無といふ一點にのみ着眼せらるゝやうになり、用言は活用語、體言は不活用語といふ風に考へられるやうになつてしまつた。果ては、辭から排除せられた從屬語の如きものも不活用的であるからといふ所から、準體言などと稱せられるやうになつたのである。一體獨立語のかゝる區別は、語形變化の有無などといふことで到底爲し得べきものでないといふことは西洋諸語の declension, conjugation といふことを見ても分る。又語順の先後といふこともかゝる對立的要素に對しては何等區分原理となるものでない。例へば統合關係や補充關係では「花が咲く」「大阪へ行く」の如く實體語は先行し陳述語が後行するが、「咲く花」「白い月」の如き修飾關係では、常に陳述語が先行し實體語が後行するのである。兩者の地位は語順の上からは殆んど對等的である。然らば之を區別すべき原理は何處に在るかといへば、山田博士の言はれるやうに心理的に之を見れば統覺作用と概念作用との別があるのである。しかし、私は之も矢張どこまでも構造關係性から區別して行かねばならぬと思ふ。構造關係と言つても、從屬關係をその區分原理として立てることはできない。それは從屬語に對する原理となるものであつて、獨立語に對し何等積極的原理となるものではない。獨立語とか對立語とか稱せられるものの區分原理は、矢張對立關係に於て求めねばならぬのである。しかし對立關係の中、並列關係は觀念語の單なる同格的並列で、兩者を區別する力なきものと

言はなければならぬ。並列關係に於て、陳述語と實體語とが對結せられることはあり得ないのである。故に陳述語と實體語との區分原理は統合關係に於て求めなければならぬのである。統合關係は兩者の性格を最も克明に對比顯現せしめる構造關係である。統合關係は言ふまでもなく主格と述格との繫合であるが、陳述語は述格となりその統合關係を成立せしめる要素となるべきものであり、實體語はかゝる統合關係の主格的地位に立ち陳述の主體を成立せしめる要素となるべきものである。

- 語
  - 文法語
  - 觀念語
    - 獨立語
      - 實體語
      - 陳述語
    - 從屬語

## 六

文法的構造は前述の如く、次第に後方に發展して行く性質のものであるが、我が國では古來かやうなことに就き、先づ詞の切れつゞきといふことが注意せられて來た。例へば栂井道敏の網引綱に「てにはの義數品あるやうなれど所詮は切と續くとの二つ也。文章に句讀あるがごとし。」とある。てにはは略〻今の文法形態であるが、道敏はこのてにはの切れつゞきを文章の句讀に關係づけて說明しようとしてゐるのである。その句讀といふのは太宰春臺の倭讀要領に「句讀トハ句ギリナリ。語ノ絕ル處ヲ句トイフ。語ハ絕ザレドモ文ノ屬ノ長キ處ハ其中ノキリテヨキ處

ニテ幾處モキリテ讀ムヲ讀トイフ。」と言つてゐるやうに、詞の斷絶する點が句であり、句中の意味關係を明瞭にするため適宜之を句切ることが讀である。之によつて詞の切れつゞきといふことは如何なるものであるかゞ略〻分るのであるが、本居宣長は詞の玉の緒に於て更に具體的な事例を以て詳細な說明を下してゐる。曰く「すべての詞づかひに切るゝところとつゞく所とのけぢめあることを、まづわきまへおくべし。是を上の件にいへる〔ぬ〕〔つ〕〔る〕と〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕との例にていはゞ「花さきぬ」「鶯なきつ」「もみぢ葉ながるなどゝいふたぐひの〔ぬ〕〔つ〕〔る〕は切るゝ辭なり。これを「櫻花散ぬる風の云々、「鶯の鳴つる枝を云々「もみぢばのながるゝ川に云々などゝいふ時は「散ぬる風」「なきつる枝」「ながるゝ川とやうに下へつゞけば〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕などはつゞく辭なり。(「ちりぬ風」「なきつ枝」「ながる川などゝはつゞきがたし。又「花ちりぬる」「鶯なきつる」「もみぢばながるるなどいひては語切れずと心得べし。かくのごとくたゞにぬる つる るゝといひても切るゝことゝ思ふは、後世人のひがごとなり。そのよしは下にくはしくいふべし。) かくて此切るゝ辭はことゞく紐鏡の右行の段々にあり。つゞく辭は中行の段々にあるなり。件の〔ぬ〕〔つ〕〔る〕と〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕との例に准へていづれをも考へさとるべし。さて、又切るゝ所もつゞく所も同じき詞もあり。聞成(キヽナス)待言(マツイフ)知(シル)などの〔く〕〔す〕〔つ〕〔ふ〕〔る〕のたぐひ、又〔ん〕〔らん〕〔なん〕などの類なり。これらは詞のつらねざまにしたがひて、切れもつゞきもするなり。ひも鏡の第卅三段〔く〕(右行)〔け〕(左行)より終りの〔てん〕(右行)〔てめ〕(左行)まで合せて十一段の辭これなり。此十一段は皆切るゝもつゞくも同じき故に、右行と中行と一つになれり。考へ見べし。」と。即ち詞が切れるといふことは言語活動が斷止することであり、詞がつゞくといふことは言語活動が繼續することである。言

語活動が斷止したり繼續したりすることは、やがて言語行動の完不完を意味することは言ふまでもない。しかして此の言語活動の斷續は外面的には發音作用の斷續であるが、內面的には言表作用の斷續である。內的言語活動が終結したか或は又未だ續行の中途であるかといふことである。內面的な言表が斷止或は繼續するといふことは、言語の結合關係が斷止したか繼續中であるかといふことである。言語の結合關係の斷繼といふことは、取りも直さず、文法活動の斷續といふことである。しかして文法活動の斷續はそれ〴〵に特有な形態的工作を行ふことによつて表示せられるのである。詞の切れるところ續くところとか、てにをはの切れつゞきとかといふことは、かやうなことを言ふのである。

文法活動が斷止するといふことは如何なることであるか。文法活動が斷止するといふことは、文法の働が極限點に到達することである。種々に展開して來た文法關係がそこで妥結し、今一歩その外に出づれば、も早文法の働く圏外であるといふことである。文法未成の語彙的言語に直面すること、二次的言語、文法的言語の領域から一次的言語單一的記號の世界を臨むことである。かやうなことは、軈て言表が一先づ結了したことを意味するのであり、言表の結了は言語活動の終結であり、言語活動の終結は言語行動の完遂を意味するのである。勿論文法活動が斷止するといふことは、必ずしも常に言表を完結せしめるとは限らない。文法活動が斷止し、詞が切れても、未だ言ひ盡してゐない場合が多々ある。さやうな場合には又更めて言を起し、かくて縷々千萬言にも及ぶのである。しかし如何に言を連ねても言表の完全無缺を期することは到底不可能である。否、空疎な言ならば、連ねれば連ねる程その心を失ふ。修辭の祕訣は、言を簡素にすることであるとさへ謂はれてゐる。一念三千大世界と稱せられる心を、

淺薄な言語記號の點綴では蔽ひ盡せないものがある。こゝに於て言表には、言語面の奥に象徴面的領域が發達しなければならぬ理由があるのである。かやうに考へて行くと、言語面的に完き言表などといふものは實際にあり得ないのである。その單複長短の如何を問はず、常に一先づ纏まつたといふ程度のものに過ぎない。しかしてその一先づ纏まつたといふことを指標するものが文法活動の斷止、即ち詞がそこで切れるといふことである。文法活動が斷止し詞が切れることが、取りも直さず言表が一先づ完結する所以である。故に文法活動の斷止といふことは、種々雜多な言表機構の單位を限るものと考へなければならぬ。言表は、文法活動の斷止といふことによつて、個個の單位的なものに斷截されるのである。かやうに文法活動の斷止は言表を單位に斷截し、隨つて言語活動も之によつて分劃せられ、かくて言語行動もそれ〴〵獨立的なものとして定立せられるのである。文法活動の斷止點は、言ふことの意志力の表れる場所である。かやうな文法活動の斷止、即ち文法活動の極限點を文法上如何に見るべきものであるかといふことに就いては、私が度々言及するやうに、それは文の成立して行く地點と考へなければならぬのである。文といふものはかゝる文法活動の斷止する地點を生産點として結成するものである。文は文法活動の完結體である。文法活動が完了し、後續の餘地を殘さぬ文法的飽和體が文である。文法活動が閉止すれば言表が完結を告げ、言語活動が斷絶し、言語行動の目的が一先づ達成せられる。かやうなものが文に外ならぬ。文といふことに關しては從來種々に說明せられ定義づけられて來たやうであるが、少くとも文法學の上ではどうしてもかやうに考へて行かなければならぬと思ふ。しかして日本語ではかやうな文を成立せしめる文法活動の斷止點は常に文の最終部位に來るのである。即ち文を前行部と後行部とに區別するとすれば、文法活動の斷止する場

所が文の後行部である。日本語では、文の終末は文を決定する心臓部位である。故に日本語では他の如何なる言語にも増して、此の文法活動の斷止、即ち詞が切れるかどうかといふことが重大な問題なのである。殊に連歌の宗匠等は、その携はる連歌の性質上喧しく之を問題にしたので、此の方面からの研究が異常に發達したのである。即ち連歌は紹巴の至寶抄に「歌と連歌と少かはり申候。歌は上の句に其意聞え候はねども下の句にて斷申候事おほし。連歌は一句一句に其ことわりなくては叶はざる事候。」とあるやうに、歌では上下の句を合せたものが一個の詩形であつたが、連歌では上下各獨立した詩形としなければならぬ。殊にその發句は一句として完結した詩でなければならぬのである。そこで同じく至寶抄に「發句の事　第一、其時節無二相違一樣に肝要に候。發句は百韵の初にて候へば、いかにもたけたかく、ゆうげんに、うちひろめになきやうに、發句は切字と申事、唯きれ字なく候へば、平句に相聞えてあしく候。四季の外雜の發句と申事は無二御座一候。俳諧も同前。」とあるやうに、季と切字とが外面的に要求せられるのである。その中切字といふのは、例へば池坊專順法眼詞祕之事といふものに發句十八切字といふことを說いてゐる。それには「かな、けり、もがな、らむ、し、ぞ、か、よ、せ、つ、れ、ぬ、す、ま、へ、け、じ」の如きものを擧げてゐるが、かやうなものを用ひるとどうして發句の完全獨立を形造り得るのかと言ふと、これらの語片は何れも文法活動を斷止せしめ、文を成立せしめる能力を有するからである。勿論個々の切字には、それ〴〵何等かの意義的なもの感性的なものを有してゐるのであるが、一般的には文成立の第一要素といふことができるのである。かやうなものを適當に使用して、發句といふものを然るべき餘義餘韻で彩りつゝ文法的完結體たらしめようとするのが切字の法である。しかし切字の法も後世になつて著しく形式化し、發句には必ず切字を詠み

込まねばならぬかのやうに唱へる人々もあつたが、之は言ふまでもなく本末を顚倒した議論で、必ずしも切字が詠み込まれなくとも、其の句が文法的に斷止終結して居れば立派に完全な發句の詩形を成すのである。しかも此の場合、文法的に斷止終結するといふことは何も用言の終止形とか命令形などの如きものばかりではなく、例へば芭蕉の「桐の木に鶉鳴くなる塀の内」の如く體言を句の重心部としたものでも差支ない。之は全然切字の詠み込まれない、謂はゞゼロ切字であるが、之も切字の一法として考へなければならない。心の切とか何とかと說明するのは後でつけた理窟に過ぎない。强ひて心の切と稱してよいものを擧げるならば、同じく芭蕉の「辛崎の松は花より朧にて」の如きものであらう。しかし去來抄を見ると「或人にて留りの難あらんやと云。其角答へて云、にては哉にかよふ故、哉留の發句にて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫れば、にてとは侍るとなり。呂丸云、にて留の事は其角が解有り、又是は第三の句なり。いかに發句とはなし給ふや。去來云、是は卽興感偶にて發句なる事疑なし。第三は句案に渡る。もし句案に亙らば第三等にくだらん。先師重ねて云、其角去來が辯皆理窟なり。我はたゞ花よりも松の朧にて面白かりしのみなりと。」とある。「我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなり」などと言つてゐる處から見ると、芭蕉の眞意は今日の文法知識から考へられる中止法の如きものにあるやうである。中止法は完全な斷止とは言ふことができないが、矢張斷止に準じて考へて行かねばならぬものである。實際芭蕉のやうな徹底した詩人になると、百の理論を以てしても到底之を蔽ふことのできない廣汎な例證を殘して呉れてゐる。眞に言靈の妙機を體認せんとするには、些々たる巷間に流布する民衆言語の蒐集にうき身を窶すことに先立ち、昔から詩聖とか文豪とか言はれて來た人々の言語を、先づ徹底的に研究してかゝらねばならぬ。これらの人々は、皆それ〴〵の立

場でその國の言語の力を最大限に發現せしめてゐる。言語活動の極限位に立つ人々である。此の意味から私は我が國語學界に新しい古典主義といふものの生れ出でんことを庶幾して息まないのである。言語學は今一度文獻學的原郷に省みる必要があると思ふのである。

文法活動を斷止することは文を成立せしめる所以であつたが、反對に文法活動を繼續することは如何なることであるか。文法活動を繼續することは言ふまでもなく言表の中道にあることであり、隨つて言語活動の續行中であり、言語行動の未だ完遂せられないことを意味する。しかしそれは單なる連續でもない。單に連續的なものは寧ろ語文的な言表である。語文的な言表に於ては文法活動の繼續などといふことは問題となり様はない。文法活動の繼續如何が眞に問題となるのは、語と語とを連結することによつて何等かの表白を爲さんとする連語的言表に於てのみである。單に總體的な語文的表白に於てではなく、分析綜合的過程による言表に於てのみ文法活動の繼續が問題となるのである。故に文法活動の繼續といふことは實は單なる言語的連續を意味するものでなく、所謂非連續的な連續でなければならぬ。切れてつゞくことでなければならぬ。今少しく明瞭に言へば、語彙的に切斷せられてゐるが文法的に連結せられることである。語としては個々別々であるが、それが文法の力で繫合せられることである。語に分析すればそれ〳〵獨立的なる觀念内容を表示してゐるものであるに拘らず、之を文法的に總括し何等かの統一的なものにすることである。言語活動の分析綜合性は語と語との關係ばかりではなく、實は文法斷止によつて成立する文と文との間に於ても認めることが出來る。文と文との間は單なる斷絶ではなく、矢張前文が後文に連續し後文が前文を受けるといふことがなければならぬ。しかし文と文との關係は、語と語との關係と同一ではない。語と語

との關係は觀念的に獨立してゐるものが文法的に統一づけられるのであるが、文と文との關係は文法的に斷絶してゐるものが思想的に統一づけられるのである。文法活動の已に完了した文が、更に大なる思想的展開の要素的なものとして排列せられるのである。かやうな關係に在るものを一般に連文と稱することができ、文法學の最終的なものとして見送る意味のものである。勿論かゝる連文關係の中には接續詞などを介入せしめてゐるものがあり、幾らか文法的連續性を認めて行かなければならぬやうなものもあるのであるが、之等は何れかと言へば、眞の文法的連續ではなく文法的連續性を觀念的なものに直した形のものである。之等が眞に文法的連續性を得るためには、どうしても複文の形を取らねばならぬのである。かやうに詞がつゞくといふこと、文法活動の繼續といふことは語彙的に分析せられる各要素が文法的に綜合せられることである。しかして要素の綜合といふことは前行後行の語順關係によつても表示せられるのであるが、最も特徴的なものは、多くの場合語尾の形態的變化や種々の形態素の添接によつて表示せられるのである。卽ち文法活動繼續の能記的示標として、然るべき形態的工作が行はれるのである。かゝる形態的變化或は添加は、日本語では先行的要素の後部に對して行はれるものであるが、所謂つゞけ手爾波とは之である。切字に對するつゞけ字である。斷止の爲に行はれる形態的工作に對する、連續の爲に行はれる形態的工作である。かやうなことは文法上如何なることを意味するか。斷止の形態的工作によつて文を成立せしめるのであるが、連續の形態的工作によつて如何なるものが齎されるのであるか。文法活動斷止によつて文を成立せしめることは、二次的言語文法的言語を、一次的言語單一記號的言語の領域に引戻すことであつた。分析綜合過程の言語を、語文的言語或は文對等語的なものと同列的ならしめることであつた。然るに今個々の語彙的要素を文法力によ

つて引寄せ、言語の間に文法活動を浸潤せしめることは、一次的言語單一記號的言語を二次的言語文法的言語に昇華せしめることなければならぬ。個々の第一言語を超えて之を材料化し、新な結合的言語第二の言語を産出することでなければならぬ。新しい言語領域を創造する意味のものでなければならぬ。嚮にも言及したやうに、私はかやうなものを普通に句と稱せられてゐるものに於て見ることができると思ふのである。句といふことに就いても、從來種々に說明せられて來てゐるのであるが、普通に考へられてゐる句は一般にかやうなものであらうと思ふ。殊に文法學上句と稱せられるものは、語の如き所與的材料的な言語に對し、文法活動の持續によつて支へられてゐる二次的言語文法的言語と考へなければならぬのである。かゝる句には種々雜多のものがある。先づ之を要素の組合せといふ點から言へば、嚮に述べたやうに二項的統一式の如きものでなければならぬ。それは、物が互に相關係して一となる爲には常に二項的でなければならぬからである。二を一にするといふことでなければならぬからである。雜多の統一といふことも只漠然と多が一となることでなく、種々の複雜な階梯を經て二項式的統一の累加が行はれて行くことに外ならぬ。卽ち二が一となり、かゝる一が他の一と對立して更に一に歸し、或は二が一となつたもの同志が相對立して一に結體し、かくて次第に複雜多岐なる統一體系が成立して行くのである。結合の根本原則は二元的相關である。三つ四つのものが同時的に結合するといふやうなことは絕對にあり得ない。結合とか統一とかといふことの根本義は、矛盾するものが一となることであるが、矛盾といふことは二つのものゝ間に於てのみ言ひ得ることである。一なるか多なるか、自なるか他なるかなどといふやうな二者擇一的にして、絕對的に第三者的なものゝ介入を許さぬ關係が矛盾であるが、かやうな矛盾は二つのものゝ間にのみ存する事柄でなければならぬ。しか

して結合するとか統一されるとかいふことは、何等かの意味でかゝる矛盾關係に立ち、相互の間が斷絶されてゐなければ無意味である。右のやうな譯であるから、種々の要素が結合して句を成す最も基本的な有樣は二項的結體でなければならぬのである。例へば

(花が)+(咲く)　　(本を)+(讀む)

(白い)+(壁)　　(短く)+(切る)

の如く結合してそれ〴〵句を成してゐるのである。又

(花が)+{(見事に)+(咲く)}　　(壁を)+{(白く)+(塗る)}

(大工に)+{(家を)+(建てさせる)}

{(白く)+(淡い)}+(月)　　{(遠く)+(飛ぶ)}+(雁)

{(蹠分)+(短く)}+(切る)

{(花)+(咲き)}+{(鳥)+(啼く)}

〔(これは)+{(氣に)+(入らないから)}〕+{(あれに)+(しよう)}

〔{(花の)+(咲かない)}+(木と)〕+{(咲く)+(木)}

の如く、それ〴〵二項的累加として句が成立して行くのである。かやうに句の要素の結合は二項式を基本として行はれ、常に二單位の結合であるが、その先行後行兩要素の結合關係には又種々のものがある。それらの中最も包括的なものは嚮に述べて置いた

修飾關係　補充關係　統合關係　並列關係

の四方式である。この四つの關係方式を大綱とし、その先行後行兩要素のそれ〴〵の性質によつて又樣々な特殊方式に分れて行くのである。隨つて具體的には種々雜多な形式の句が成立して行く譯である。しかしてかやうな句の成立因素、卽ち文法活動繼續のための形態素は、日本語では常に先行的要素の後部に於て屈折し或は添接せられるのである。上の四つの關係方式の中で、統合法によつて成立する句は論理的文法機構中特異な地位を有するものでなければならぬ。一體、並列法は類同的な二つのものが個々別々のまゝで結びつけられてゐるに過ぎないものであり、修飾法と補充法とは內屬外附の別があるが、兎に角、一が他に從屬するもので前者と正反對の關係にあるものである。卽ち前者は二つのものが二つのまゝで單に對立結合を爲してゐるのであるが、後者は一方のものが全く他の一方のものに隷屬してしまつてゐるのである。然るに統合法は全然性質の異なる二つのものが一旦對立し、それが相互に限定し合つて一つのものとして統合せられるもので、謂はゞ模式的な分析綜合の過程をとるものである。並列法とか修飾法補充法などは、二つのものが二つのまゝか、或は二つのものゝ或一つに支配せられ、結局何れかの一つのものに歸せられる如きものであつたが、之は二つのものが雙方對立的に結體し別に新しい一つのものを創造するもので、動的力的である。觀念相互が力闘し思想を生產して行くものである。二つの觀念が二つの觀念として結合せられ、或は一つの觀念に歸着するものではなく、二つの觀念が判斷關係に立ち命題の如きものを成立せしめるのである。かやうなものは縱、文法活動が斷止し詞が切れてゐなくても思想內容としては完全なものと言はねばならぬ。勿論嚴密な意味での完結思想とは言ひ得ないが、內容關係として全きものであると言はねばならぬ。言

語斷止の力を借りることなく、觀念活動自體として內面的に完結したものである。しかし、之を以て直ちに文法活動斷止によつて成立する文と同一視すべきものでもない。思想內容として完全であつても、言語的に獨立し言語行動の完遂體にあらざる以上と文見ることは許されない。

以上、我が國で昔から謂はれて來た詞の切れつゞきといふことの意味を概略說明したのであるが、要するに詞が切れるといふことはそれが文を成立せしめて行くことであり、詞がつゞくといふことはそれが句を成立せしめて行くことである。卽ち詞が切れゝばそこで文法活動が打切られ、二次的言語文法的言語として展開して來たものが停止して一次的言語語彙的言語に還元し、獨立的完結的な文を產出して一つの言表單位を劃するのである。又詞がつづけば、文法活動の繼續により一次的言語單一記號的言語が展開して、二次的言語文法的言語を成立せしめて行き、分析綜合的な句を產出してそれが言表の部分的要素となるのである。日本語では前者の如き文を結體成立せしめる要素は普通その後方に置かれ、それ〴〵の要素を究極的に統括して居り、後者の如き句を形造つて行く諸要素は次第に前方に配置せられ、その言表內容を複雜にしてゐるのである。しかしてかゝる諸要素は何れも、その後部に於て屈折するなり、助詞助動詞の如きものを添加するなりして、それ〴〵然るべき形態的工作が施されてあることは言ふまでもない。例へば(花)+(が)、(見事)+(に)、(咲)+(く)とか(大工)+(に)、(家)+(を)、{(建)+(て)}+(させる)の如きものである。言表はかやうなものが樣々に組合せられて、分節的に展敍せられて行くのである。かやうな切れる詞とつゞく詞、卽ち文を成立もしめる要素と句を成立せしめる要素とは、單なる材料的所與的な語と異なる一種の單位でなければならぬ。かやうなことは從來餘り注意を拂はれなかつたやうであるが、私はそれは

學者の手落ちでないかと思ふ。一時盛に論議せられた「靜かに」「賑かに」「泰然と」「斷乎と」などの「に」「と」を活用語尾の如きものとすべきか、或は又副詞の助詞とも考ふべきかと言つたやうな疑問も、元はかやうな區別がはつきりしてゐなかつたところから起つたのではなからうか。一體材料としての語と、文や句を成立結體せしめる要素となつてゐるものとは何處に相違點があるかと言へば、前者は形態部的工作が未定的であるが、後者は形態部的工作が決定的であるといふ點に存するのである。譬へて言へば、家を建てるに就いては、石とか材木とかといふものが必要であることは言ふまでもないことであるが、言表に對する語の地位といふものは、恰もかやうな建築材料としての石や材木などに該當するのである。さていよ〳〵家屋を組立てようとするためには、石とか材木とかといふ、謂はゞ素材的なものを其の儘に用ひるのではなく、之を土臺石に切るとか、柱とか棟とかといふものに造るなりして、素材的なものに何等かの工作を施してかゝらなければならぬ。文や句を成立結體せしめる要素的なものといふのは此の土臺石や柱棟に相當するのである。かやうな譯で兩者の間に明瞭な區別がある筈であるが、之等を混同した頭で「靜かに」とか「斷乎と」とかいふやうな取分け用法の狹いものを考へるのであるから、その「に」や「と」が或は活用語尾に見えたり、或は助詞に見えたりして容易に決着しないのである。「靜かに」の「に」、「斷乎と」の「と」の如きものを活用語尾とすべきか、或は助詞とすべきか、この問題を解くことが今私が、こゝで言はうとしてゐる事柄の核心に直接觸れることになると思はれるので、多少傍道に逸れる嫌がないでもないが、少しく之に就いて論じて置きたい。「靜かに」「斷乎と」の「に」「と」を活用語尾の如きものと考へようとする論は、言ふまでもなく之等を一語と認めようとするのである。その理由とする所は、「靜か」とか「斷乎」とかといふも

のはそれ自體で獨立に使はれることがなく、常に「靜かに」「斷乎と」といふ形、卽ち「に」や「と」に導かれた形で用ひられてゐるといふにある。しかし「靜かな海」「實に靜かだ」「大分靜かです」「靜かでよい」「中々靜かである」「いと靜かなり」「靜かなる海」「斷乎たる決心」の如き用法もある。所がこの論者の多くは、之等を一括してカリ活と稱せられるものと共に形容動詞といふ新しい語範疇を立てようとするのである。形容動詞を立てることの可否は暫く措くとして、次に「遙か向かふに」「はる〳〵來る」「斷乎排擊せよ」「自然さうなる」の如く、「に」や「と」の附かない用法も擧げることができる。しかし、論者は又之等を歷史的に考へて後世に「に」や「と」が落脫した、第二次的な略體であると言ふのである。果して如何。更に「必要の品」「徒の言」「實のところ」「自然の事」「うたての振舞」の如き「の」に導かれた用法もある。之に就いて或人は誤用であると言ひ、又或人は名詞的な用法であるともいふのである。以上は、「靜か」とか「斷乎」だけでは名詞などのやうに完全獨立ではない、そこで之に添接せられる「に」「と」の如きものと合併したものを以て一語と見做さなければならず、隨つて「に」「と」はその語尾でなければならぬといふやうな先行的意義部から後行的形態部を眺めるやり方であるが、次に之と反對に、後行的形態部から先行的意義部を眺める方法を採つて考へてみようと思ふ。それには先づ、「に」「と」が或意義的要素に添接せられた場合には之に內屬して一つの語を形成し得る性質のものであるかどうかを考へてみなければならぬ。例へば「白む」「赤らむ」「黃ばむ」「大人ぶる」「いやがる」「神さぶ」「女々しい」「男らしい」の「む」「らむ」「ばむ」「ぶる」「がる」「さぶ」「しい」「らしい」のやうな成語的要素と、この「に」「と」とが同樣のものであるかどうか。私にはどうしてもさうと思はれないのである。寧ろ之は、「八時に始まる」「間に挾む」「秋にな

る」「白となる」「悪魔と變ず」「山と積む」の如く使はれる「に」「と」と略〻同様なものであると思はれるのである。若しさうとすれば、之は位格表示の助詞と見なければならぬ。位格を示す助詞は言ふまでもなく文法語として完全に獨立する性質のものであるが、若し「靜か」「斷乎」の如きものが非獨立的なものであるとすれば、獨立的なものが非獨立的なものに附屬することゝなるのである。のみならず、位格表示の助詞の一般的性質として、常に獨立的な觀念語に添接し之を以て句の要素たらしめるのである。卽ち成語要素などとは正反對に、語として獨立的なるものに添接することにより、その語の獨立性を破壞し要素的なもの部分的なものに仕立てるのである。故に少くとも位格的な助詞の系統を引いてゐる「靜かに」「斷乎と」などの「に」「と」は、之を添へたが爲に決して語として獨立的なものとなるのではなく、却つて「靜か」「斷乎」などの本來的獨立性を奪ふ結果となるのである。しかも「に」「と」は常に獨立語にのみ添加せられる性質のものであつてみれば、「靜か」「斷乎」などは元來獨立的な語と見做さねばならぬのである。かやうに「靜か」「斷乎」の如きものを獨立的な語と見れば、所謂形容動詞として體系づけられてゐる諸活用形は、之等の語の主要なる用法形態であると見ることができる。卽ち之等の語が言表の要素的なものとなるには、多く形容動詞體系として示された形態に工作せられて行はれるものと考へなければならぬ。謂はゞ形容動詞體系は、用法的な範疇體系であるのである。しかし「靜か」や「斷乎」の如きものは本來的に獨立的な材料であるから、單獨的に用ひられるやうな場合もあれば、又名詞的な用法も可能なのである。之は恰も、數詞や抽象的な意味の名詞が、時には副詞の如く用ひられることがあるのと同様である。今若し、かやうな事情を強ひて打消し　カリ活などに準ぜんが爲にナリ活とかタリ活などといふものを考定し、形容動詞を何處まで

も立てようとするならば、之を押進めて行くと今度は名動詞などと稱せらるべきものをも立てなくてはならぬのである。或は名詞は「の」「が」「に」「を」「と」「へ」「より」「から」などを附けることが出來ると言ふかも知れぬが、それならば、それら全部を包括して名詞の複雜な格體系を組織することもできるのである。しかしかやうなことをすることは、果して日本語を眞に體系づける所以であらうか。一體カリ活などといふものも、鈴木朗の言語四種論あたりから發出してゐるやうであるが、餘りに形に執はれ過ぎた考へ方ではなからうか。しかもカリ活は「くーあり」の約ではなく、形容詞の加行系統第一活用「か」に再語尾「り」が膠着したものゝやうである。恰も現存の「けれ」が、「け」に「り」が膠着した形の名殘であると考へられると同樣である。して見れば、カリ活自體が已に獨立的に立てらるべき性質のものではなく、形容詞體系の中に包括せらるべきものである。又さうした方が、口語とか種々の方言に於ける之等の事實を考へる場合却つて便利であると思ふ。かやうに形容動詞の根幹とも言ふべきカリ活ですら其の獨自性が問題とせらるべきものであるが、況してナリ活タリ活等に至つては、之を語として眺めようとすれば恰も寄木細工のやうなものである。

日本語は膠着語であるとか接續語であるとか謂はれてゐるが、かやうな言語にあつては、先づ觀念語と文法語とが殊更明瞭に分れてゐて、それらが實際に用ひられる言表要素となる場合、觀念語に文法語が接合し所與的材料的な語と異なる形成的要素的な言語單位を形造るのである。勿論一見さうでないもの、例へば「これ幾ら」「僕參りません」「花咲き、鳥啼く」「あはれ、あなおもしろ、あなさやけ、をけ」の如きゼロ形態的なるもの、或は「花咲き、鳥啼く」「行く春」「とく行け我が子」の如く形態的表徵があつても、それが自生的なものもあるが、之等を

も含めて、一般的に所謂實辭的のものと虛辭的のものとの接合によつて、語とは異なる意味の種々なる單位が形造られることによつて行はれるのである。私はかやうなものを節と稱するのである。所與的材料的な語に對し、形成的要素的なものを節と稱するのである。卽ち前の例を以て言へば「靜かに」「賑かに」「泰然と」「斷乎と」の如きものは節と稱せらるべきものであつて、語ではない。觀念語「靜か」「賑か」「泰然」「斷乎」等に、文法語「に」「と」等が接着せる節である。「靜かなり」「賑かなり」「泰然たり」「斷乎たり」「靜かだ」「賑かです」の如きものも又同樣である。文が成立するにも句が結體して行くにも、材料的なものとして與へられた語が、直ちに然成るものではなく、觀念的意義的なものに文法的形態的なものが接合し、一旦かゝる節の成立する過程の介入がなければならぬのである。故に文とか句とかといふものは、直接的には節の分合過程であると考へてよい。述べるといふことは節の延展であり、分るといふことは節に分析して行くことである。材料的な個々の語は要素的な種々の節となり、そこに於てそれ〴〵の機能を實現するのである。語は潛在的待機的言語であり、節は顯在的實演的言語である。語は靜的であり節は動的である。語は言語體系としての分節單位であり、節は言語活動としての分節單位である。體系として潛在待機してゐる語が實際に役立てられるためには、必ず節の形をとらねばならぬのである。語が節となつて始めて然るべき機能を實現するのである。之は恰も、個々の音韻が語音として實際にその機能を發揮するには、樣々の音節を形造る如きものである。しかして日本語の音節構造は子音がその特殊面を表すものとして先行し、母音がその基體を成すものとして後行してゐるのであるが、言語活動の分節に於ても、その特殊面としての意義部が先行し、基體面としての形態部が後行する構造性をとるのである。前者は節の素材とか內容などと言ふべきもの

であり、後者は節の形相として節を成立せしめて行くものである。しかして後者を形造るために、語それ自體の中に内生してゐる活用とか屈折などといふ文法素の外に、種々の補助的な文法語片が添加せられ、節の形態部が次第に豐富になつて行くのである。

文法的構造には、右の如き節形成の爲のものの外に、語を再造する意味のものがある。節形成の斷續法は語の用に關するものであるが、之は語の體に關するものである。卽ち前者は語の性質に從つて種々に文法的工作が行はれるのであるが、之は語の本質的核心そのものに種々の改裝を加へん爲に然るべき文法的工作が行はれるのである。文法的工作が單に語の文法部位に對して行はれるばかりではなく、外郭的ではあるが、觀念部位にも何等かの影響を及ぼし、その語を動搖せしめ之を改變再造せんとする意味のものである。勿論之には種々の程度のものがあるが、一般的には節を成すものに對し成語的のものとして區別しなければならない。この種のものには語の文法機能を改裝する性質のものと、語の意義内容を單に裝定するに過ぎないものとがある。前者は例へば「行かれる」「行かせる」「行かない」「行きます」「行つた」「行くまい」「行かせられた」「行かむ」「行かず」「行かじ」「行きぬ」「行きつ」「行きたし」「行くべし」「行くらむ」の如きものや、「深み」「悲しさ」「寒け」「男らしい」「勝手がましい」「黄ばむ」「古めかしい」「おもしろがる」「上品ぶる」「氣違じみる」「花やか」の如きものなどであるが、之等は何れも種々の文法素を接合することによつて語の文法的能力を變質せしめ別樣の語として再造する意味のものである。しかし之には種々の段階があつて、例へば「(頸)る」「(腹)む」「(股)ぐ」「あはれむ」「大人しい」「黄色い」「圓い」「及ぼす」「嵩まる」「滅ぼす」「加はる」の如きものから、「しやうぞく(裝束)」「れうる(料理)」「こじく(乞

食)」「さいしく(彩色)」のやうに文法素がその語の内部から自生する如きものすらあるのである。後者は例へば「み位」「お心」「御殿」「眞白」「素肌」「無禮」「お近い」「こ綺麗」の如きものや、「神さま」「お前さん」「林くん」「我ら」「私ども」「君たち」「五年め」「何番」「一等」「十號」の如きものであるが、何れもその語の意義を扮飾する性質のものである。以上は所記的方面から眺めたのであるが、能記的方面から見て之を區別すれば、語尾を形造るに過ぎない性質のものと、語幹の一部をも形造る性質のものとに分れる。前者は嚮の例で言へば、「行かれる」「行かせる」「行かない」「行きます」「行つた」「行くまい」……の如きもので、普通に助動詞などと稱せられてゐるものが之に該當する。山田博士が之を複語尾であると言はれたのも、かやうなことからであらうと思はれる。後者は「深み」「悲しさ」「寒け」「男らしい」「花やか」「うれしさう」の如きものと、「み位」「眞白」「お近い」「お宮」或は「神さま」「我ら」「君がた」「一等」などの如きもので、普通に接辭と稱せられてゐるものである。しかして此の接辭には接頭辭と接尾辭との二種があることは言ふまでもないことであるが、この兩者を比較すると、接頭辭の方は意義的觀念的であり接尾辭の方は形態的文法的である。隨つて又接尾辭の意義的なものと、意義的な接頭辭とを比較してみても、前者はより文法的であり後者はより觀念的である。かやうな能記的な見方は勿論成語的要素ばかりではなく、成節的な要素に於ても行ふことができる。即ち語尾變化とか活用素とか稱せられるものは内生的自動的な方式であり、助詞を添へて行くものは外附的累加的な方式である。

以上で觀念的構造に對立する文法的構造に就いて概觀したのであるが、要するに文法的構造の方式には先づ斷續法とも稱すべきもの、即ち節を形成するものと、接合法とも稱すべきもの、即ち語を形成するものとに大別するこ

とができる。斷續法には文の成立因である斷止法と、句の成立因である連續法とが區別せられ、又之を外形的に見れば、活用法とも稱すべきものと助詞法とも稱すべきものとに區別することができる。次に接合法には新な文法機能を生ぜしめる裝形法とか語形法などと稱すべきものと、意義的扮飾を爲す裝義法とか語義法などと稱すべきものとに區別することができる。之を又外形的に見れば助動法とか接辭法などといふものが區別せられるのである。

文法的構造
- 斷續法（成節法）
  - 斷止法（成文法）
    - 活用法
  - 連續法（成句法）
    - 助詞法
- 接合法（成語法）
  - 裝形法（語形法）
    - 助動法
  - 裝義法（語義法）
    - 接辭法

## 七

私はこの一文に於て、日本語の構造性に就いて概觀してみた。日本語の構造原理とも目せられるものを中軸とし、軈て構造性の種々相を展開すべき序說を行つてみたのである。勿論それは未だ充分なる把握に到達してゐるものとは言へないのであるが、ともかく日本語に於ける論理的文法機構の中心髓に就いて直接的に說述してみようとしたのである。日本語の文法機構は論理的なものの外にその上位的なものとして倫理的なもの、下位的なものとして審美的なものがあり、論理的なものはかゝる全機構の中軸骨體としてあるものである。論理的文法は文法の總てではない。文法機構の全面を支配し之を蔽ひ盡すものではあり得ない。從來の如き論理的文法に終始せんとする考へ方

では、如何にしてもそこに洩れて行くものがあるのである。とは言へ、論理的文法は文法機構の基本的なものであるといふことは否定することはできない。倫理的文法や審美的文法は、論理的文法に依據してゐる一面があるのである。しかし論理的文法と言つても、形式論理的な考へ方乃至は論理學的論理の考へ方で之を眺めて行つてはならぬ。そこには主述的文法とも言ふべき狷介なる文法機構しか立たず　その極、論理的文法の凝縮消滅を見なければならぬのである。論理的文法の眞の機構性は所謂より寛容なる論理或は原論理的論理、もつと適確に言へば言語の論理とか言語の構造性とかといふものを平坦に眺めて行くところに浮出て來るものと言はなければならぬ。論理學的論理を一歩退いたところに成立せる、雜多な論理性構造性を認識するところに眞の論理的文法機構といふものが立てられるのである。かやうなものの成立は記號の結合にある。言語が單一記號的ではなく、かゝる個々の記號を結合し、そこに二次的言語の世界を見出したところに論理的文法といふものの道が開けて行くのである。さうして已に記號の結合といふことが方式化すれば、それと同時にその反面として記號の非結合といふことが方式化さゞるを得ない。そこで言語の斷止連續といふことが、個々の記號と共に言語の第二領域として問題となるのである。かやうなものが論理的文法の根源事實であり、かゝる斷續の法が種々に發展して現實の論理的文法機構といふものが成立してゐるのである。しかして一方その上位と下位とに、之を骨體據處として倫理的文法審美的文法が發達してゐる。

斷止法は文法事實の極限として文を成立せしめるものであるが、連續法は種々の文法事實を生産し文法活動の眞只中に立つものである。斷止法は勿論文法事實の一つと考へなければならぬが、それは最後的なものであり、そこ

に成立して行く文は内向的には文法活動を總て抱擁し盡し、外向的には文法活動の圏外を臨む意味のものでなければならぬ。之に反し、連續法は文法活動をどこまでも進展せしめんとし、切れ〴〵に浮動する記號を引寄せ、或は記號の内部に分析綜合過程を醸成する言語論理の能因である。言語の構造性を一義的に支配して行く原動力である。かやうな連續法は凡そ二様に考へることができる。その第一は文を成立せしめる言語斷止に對立するもので、句を結成し二次的言語を形造り行く觀念語の連續法である。形態の介入による意義部間の相關々係である。第二には文や句の要素的なものを形成する文法語の連續法であり、意義部と形態部との融着關係である。前者は觀念的構造の爲に專ら行はれる先行的關係であり、後者は一般に文法的構造の爲に行はれる後行的關係である。前者の觀念語的連續法には先づ從屬法と對立法とが區別せられ、從屬法は更に修飾法と補充法とに分れ對立法は統合法と並列法とに分れる。又後者の文法語的連續法には先づ文や句の直接要素である節を形造らんとするものと節形成の材料、隨つて文や句の間接要素である材料語を再造せんとするものとに區別しなければならぬ。即ち成節法と成語法とである。成節法は斷止法と第一の觀念語的連續法に對應する意味のもので、之には更に活用法ともいふべき内生的なものと助詞法ともいふべき外附的のものがあるのである。成語法は一般に文法の共時的事實と通時的事實との中間的なところに位するものとも言ふべく、事柄によつては文法體系の中から除外しなければならぬものもあるのである。しかし私がこゝで言ふ成語法は、明瞭に共時相の領域内に所屬するものをのみ問題にしてゐることは言ふまでもない。之等の中最も顯著なものは、普通に助動詞と稱せられてゐるものを動詞語尾に添加し、複合語尾を形造り動詞の性質を變曲して行くものである。更に語幹内に入込み語を再造して行く接辭の中、離接的なものは矢張この

種の文法問題として取扱はなければならぬ。

日本語に於ける論理的文法機構の事實内容は、大略右の如きものでなければならぬ。しかしてかゝる事實内容の中心を貫く骨髓とも見るべき事柄は、より觀念的な要素が先行的であり、より文法的な要素は後行的であるといふことである。日本語の二項式的累加相を分析するに當つて、先行する要素は後行する要素に比し觀念的に傾いたものであり、後行する要素は先行する要素に比し文法的に傾いたものであるといふことを先づ念頭に置いて、然るべくそれらを處理して行かなければならぬ。日本語といふものは、かやうな原理性から種々の論理的文法事實に分岐發展してゐる構造的全一であると考へて差支ない。日本語の現在ある如き構造性は何時如何なる處で成立したかは知る由もないが、文獻の辿り得る範圍内に於ては、常にかゝる原理性を中心核として同心圓的なものを描いて展開し動を續けて來たものであり、隨つてそれは日本知性の運命的特質とも考へらるべきものである。我々が日本語を語るとき聽取るとき、或は綴るとき、讀むときは勿論のこと、思索し想像する時でも常にかやうな原理性に從つてゐるのである。大和民族の言語活動や、論理理性の原本的公理といふものは、より觀念的なものより質料的なものが先行し、より文法的なものより形成的なものが後行する二項式的累加である。勿論普段の言語活動に於てはそれは殆んど意識されることなく遂行せられて行く。常に無意識裡の中に行はれて行く。殊に眞に日本語を語り得る人であればある程、恰も新鮮なる空氣を呼吸する如く、無爲の中にそれが行はれるのである。しかし、かやうなことを以てその原理性を疑ふやうなことがあつてはならぬ。普段に餘り意識されないことであるからと言つて、その原理

性を否認してはならぬ。一體、習熟せる眞の言語は、個人的には常に無意識的でなければならぬ。精神的物質とか社會的物質とか言ふものの自律的現象として行はれるものでなければならぬ。意識的なものは言に傾いたものであるか、又未だ習熟化せられざる言語でなければならぬ。眞の意味の言語活動は、個人的意識の基底に社會的生理とも言ふべきものとして行はれる無意識的事實でなければならぬ。殊に言語の言語とも言ふべき、純乎たる構造原理は殆んど我々の日常的な意識に上り得ないものである。意識の表面に現れて來るものは、かやうな根本的なものよりは寧ろ特殊的例外的なもの、謂はゞ語彙的方向に傾いた諸事實、更に個人的創意を許して行く言事實である。

日本語の論理的文法機構はかやうな原理性を最深底とし、次第に積重ねられた雜多な構造性的事實の組織體である。しかしそれは常に無意識的事實であつて、ともすれば意識の表面に浮動せんとするもののあるのは、語彙的未成品か化石物か或は言表的なものに外ならない。かやうなものは文法事實の例外的特殊的のものであり、論理的文法機構の表面に浮かび出る鐵滓である。勿論文法學の開ける最初に於ては、かゝる例外的特殊的なものを問題としなければならなかつたであらう。文典は誤用を正し正用に導くことを念とするものであつた。しかし、科學としての文法學は更にそれを超え行きその根柢を開拓し、機構の全面から包括的に示さなければならぬ。個々の文法事實に關する教書ではなく、かやうな教書的なものを背後から支配するものに向かつて次第に科學的メスを振るひ、斯くて眞に其の言語の根源的なものから機構の末々に至る全事實を開示するところがなければならぬのである。私はかやうな意味に於て日本語の論理機構の根本原理として、より觀念的なものは先行しより文法的なものは後行するといふ具體的一般性を擧げるのである。日本語のロゴス性はかやうなものから流出して居り、又將來も無限にそこ

から分岐發展して行くであらう。それは日本語の連續原理であり、句を構へ文を敷く動かすべからざる規格である。文法事實は一般的に言語の斷續法であると考へるのであるが、言語斷止の如きものも矢張後行部と目せられる斷止的部位が之に先行する連續的部分に對し文法的である。連續的部分は文の觀念內容を形造らんとするものであり、斷止地點に於て之を文として統括し文の文法力が眞に働いてゐるのである　しかしてその文成立の文法力の働き方、斷止地點の形態には種々のものがあるのであるが、古來我が國では之を切れ字と稱し極めて眞劍に研究せられて來たのである。言語の斷止に對する言語の連續に於ては勿論先行部が觀念的であり、次の單位に連續せんとする後行部は文法的である。かくして句が結成し語が再造せられるのであるが、かゝる句の要素として語を材料として形成せられる言語活動の分節的單位としての節は、語音の發音單位としての音節が特殊的子音が先行し、基本的母音が後行するのと同樣に、觀念的な意義部が先行し文法的な形態部が後行する構造體をとるのである。

かゝる論理的文法機構は文法機構の主要なるもの、中軸骨體を成すものであるが、日本語にあつてはそれに肉を附け血を通はせてゐる倫理的文法機構、及び審美的文法機構の存在性を忘れてはならないのである。如何なる言語に於ても論理的文法機構はその中心を成すものであるといふことは、一般的に肯定し得ることであるが、只それのみが文法學的對象の總てであるかの如く考へるのは早計粗漏と言はなければならぬ。特に日本語の如くその上位的機構として倫理的文法人倫的間柄の文法が成立し、その下位的機構として審美的文法、情緒纏綿の文法が儼として存立してゐる言語にあつては尙更である。日本語は一般に困難な言語であると謂はれてゐるのは、他にも原因があるが、多くその故である。しかしそれは日本語そのものの罪ではなく、却つてその學習の方法に缺陷があつたので

ある。殊に日本語に關する知的組織といふものが、未だ眞にその核心を捉へて說明してゐない爲であつたと思ふ。日本語に卽しない學的體系に媒介せられてゐたからであると思ふ。眞に日本語に妥當な理智的手段を介して秩序正しく學習して行けば、さまで困難な言語ではないと思ふのである。日本語は誰しも氣付く如く極めて分析的な言語である。語彙的ではなく文法的である。任意性ではなく配意性である。この點日本語は自然的な學習よりも寧ろ合理的學習に對し恰好の言語であると言はなければならぬのである。莊嚴を誇る支那語や歐米諸國の言語とは比較にならぬ位少數簡素な語彙を、言語活動の途上に於て一定の方式に從つて只組合せて行けばよいのである。肝要は文法的機構にあるのである。しかもその中軸骨體である論理的文法機構は、上述の如く極めて直截簡明なる原理によつて統整されてゐるのである。そこに一面盡し難い深みがあるのであるが、又取附き易い言語でもある。逸早くその根本原理さへ押へてしまへば、後は絲を繰る如くに序でるのである。日本語の學習はかやうなものを根幹として常に展開されなければならず、日本語の知的組織はかやうなものによつて貫かれてゐなければならない。かゝる原理は、古代語より近代語、近代語より現代語に進展するに從つて、次第に挾雜物的形骸が芟除せられ、益々顯に純一になつて來る傾向がある。勿論そこには逆行的に之を混亂せしめ遮り隱さうとする種々の因子も働いてゐる。しかし眞の根本原理とも稱すべきものは微動だもしてゐないのである。同心的に波動してゐるに過ぎない。それは日本語の根元的構造性をより分明に浮出さんが爲の悠久なる歷史的運動である。隨つて日本語のかゝる歷史的展開の繪姿の幾枚かを重合せてみることにより、其の構造原理或は理想態とか可能態とかいふものを直下に讀取ることができるのである。しかして又一面かやうなものを鍵鑰として未來の狀態を覗ふことすら不可能ではない。逆視的に溯

行する比較法により湮滅せる共同祖語を再構する如く、順視的に流を下る歴史法は、特に實現せらるべきものの輪郭を未然に構想することも出來るのではないかと思ふ。しかして眞の國語問題の解決といふものは、常にかやうな方向に於て考究せられなければならない。私は以上の如き意味に於て日本語の論理的文法の機構を解剖してみようと思ふ。